中學國文教科書

修正十二版

卷四

375.9
Y019
資料室

41818
教科書文庫
4
810
41-1918
200030
1998

375.9
Y019

寶料資

修正十二版
文部省檢定濟
大正七年一月九日　中學校國語科教科書

吉田彌平編

中學國文教科書

卷四

東京　光風館藏版

廣島大學圖書之印

廣島大學 教 46546 圖書

中學 國文教科書 卷四

目次

一 自恃……坪内逍遙 一頁
二 境遇（西鶴）……五
三 白耳義の落人その一（口語文）……六
四 白耳義の落人その二（口語文）……一三
五 樂地……幸田露伴 二三
六 小早川隆景……新井白石 二七
七 利根川の秋曉（口語文）……德富蘆花 三三

八 富士雪を帶ぶ……德富蘆花 三七
九 水精の玉(新體詩)……幸田露伴 三九
一〇 奈良の旅(書牘文)……佐々木信綱 四一
一一 杉田壹岐……室鳩巢 五〇
一二 忠魂塔(口語文)……五七
一三 海軍戰死者を祭る……東郷平八郎 六二
一四 赤間關……遲塚麗水 六五
一五 武藏野(口語文)……國木田獨歩 六九
一六 蘇武(新體詩)……坪內逍遙 七三
一七 朔北瞥見……八〇
一八 八束穗(短歌)……八五

一九 大禮拜觀(口語文)……芳賀矢一 八七
一 入洛……八七
二 賢所大前の儀……九一
三 紫宸殿の儀……九六
二〇 乃木將軍(新體詩)……森鷗外 一〇六
二一 讀書……坪內逍遙 一一二
二二 古今千遍(書牘文)……雨森芳洲 一一七
二三 本多重次……新井白石 一二一
二四 寒稽古……一二九
二五 公子の躾方を申遣はす(書牘文)……德川齊昭 一三二
二六 道話一則(口語文)……柴田鳩翁 一三七

目次終

二七　岩倉右府その一……井上毅　一四三
二八　岩倉右府その二……井上毅　一五〇

廣島大學圖書之印

中學國文教科書卷四

一　自恃

坪内逍遙

ネルソン（1758—1805）

英佛の艦隊のナイル近海にて將に會戰せんとせし時の事なり、英の水師提督ネルソンは諸將を旗艦に集めて豫ての戰略を示しけるに、大佐ベリー喜びて曰く、「若し此の戰略によりて勝つことを得ば、天下の驚歎いかばかりならん。」と。提督曰く、「若しとは何ごとぞ。勝利は確實なるを。但し誰が生存して其の

情況を報ずるかは別問題なり」と。ネルソンが自ら恃むことの如何に厚かりしかを見るべし。

成功の要具一二のみならざるなかに、自ら恃むの德は其の最も緊要なるものゝ隨一なり。自ら恃むとは、彼の「自ら助けよ、天汝を助けん」といふ古語の意を體し、他人の助を俟たずして專ら自己の力を恃み、進んで事に當るの謂なり。

ネルソン

ジョンソン
英國の著作家。
(1709—1784)

蓋し內より來る助は常に其の人を強くすれども、外より來る助は必ず毎に之を受くる者を弱くす。彼の富貴の子に薄志者の多きは、幼きより起居・眠食共に他人の奉侍を俟つに慣れて、自ら彊むる力を鈍らしめたればなるべし。此の故に新井白石は河村瑞賢の好意を辭し、ドクトル、ジョンソンは贈物の靴を斥けて穢く古きを穿ちたりき。「貧苦・病苦に福音あり」といひ、「逆境は最も有爲なる者を卒業せしむる學校なり」といひ、「艱難は人を玉にす」といふ。いづれも人は全力を試錬せらるゝ機を重ぬるに及びて、はじ

めて其の本色を發揮するをいへるならん。古今・東西の一藝・一術に秀でたる人の傳を讀むに、名人・上手の名を少くとも其の一代に知られたる程の者は、其の修行期の若干頁を血の涙の歴史たらしめざるは無し。されば、彼の金翅鳥とかいふ鳥に住き音を出さするためには、其の目に燒け針を刺込むといふ話あるも、全くの拵へごとにはあらざるにや。

人生れながらにして才と不才とあり、又健康と病弱とあるは、爭ふべからず。これ運命なり。されど其の才をして大なる用をなさしめ、其の健康を保全して長壽ならしむるが如きは人の力なり。力めて已まずんば、不才をも有用の材たらしめ、病弱をも活動に堪へしむるまでに鍛ひ成さんこと、望みがたきにあらず。人は宜しく人事を盡して天命を俟つべきなり。運命と境遇とが人を殺活することあるは事實なれども、機會を利用するに敏なる者は、自ら能く境遇を造るなり。（中學修身訓）

二　境　遇

境遇ガ、我境遇ヲ作ル。

用アル鍵ハ常ニ光ル。

二兎ヲ追フ者ハ一兎ヲモ得ズ。

數多ノ朋友ヲ有スル者ハ一ノ朋友ヲ有セザル者ナリ。

自ラ高クスル者ハ卑クセラレ、自ラ卑クスル者ハ高クセラル。

三　白耳義の落人　その一

十月二十日大正四年。

十月二十日、雨はじめ〳〵と降る。海から吹きつける風は言はん方なく冷たい。如何さま亡國の民を

タイムス　ロンドンタイムス。倫敦著名の新聞紙。

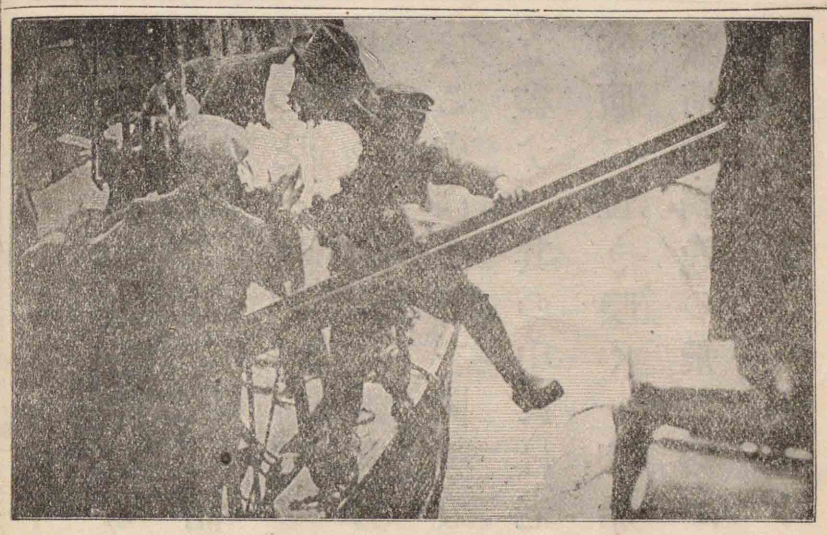
迎へるには似つかはしい日和である。

タイムスのハートレー君を探し當てゝ、兎も角も寒いからとて、お茶にする。喫茶室には十餘人の女が、矢張寒さ凌ぎに茶を飲んでゐたが、何れも此の邊の然るべき家の奥さんで、避難民の通譯に當るために來てゐるのだとハ君が言ふ。船が何時着くとも分らぬので、朝から晩まで波止場に來て詰めてゐる。

ハ君なども終日波止場に立ち通し、時には夜中過ぎまで居殘ることがあるといふ。

なぜ船が何時着くとも分らぬかといふ問題から談

が始まつた。白耳義の民は、獨逸兵の言語道斷な暴戾殘虐におぞ毛を振つて、誰一人安心して本國に踏みとゞまらうといふものはない。リエーヂが落ち、ブリュッセルが敵の手に入つた頃から、そろ〳〵と難を避けて諸方に落延びたものだが、アンウェルスの落ちる前後に至つては、さながら潮の寄するが如く、我一と和蘭・佛蘭西・英吉利を指して本國を逃出した。陸續きの和蘭や佛蘭西に行く者は姑く措いて、英國へ逃げて來る者の爲には、其の筋でも出來る限の便船を用意して、貧富の別なく、無料で渡航させようと試みたが、何分何千・何萬といふ人數を僅の船で一時には如何ともすることが出來ない。船といふ船はぎつしりと人に詰つて、まるで身動きもならぬ。やつと一艘出る。後の船が又すぐ一杯になる。乘り損つた幾萬の老若男女は着のみ着の儘で、遙に傳はる砲火の聲を聞きながら、二夜も三夜も波止場に立盡す。其の中には老人が病みわづらふ。子供が空腹に泣き喚く。懷胎の女が產をする。其の上を無情な獨逸の飛行機が飛廻るので、氣の弱い者は其處にも此處にも氣絕する。



白耳義國民の避難

それやこれやで、船の發着がまるで定まつて居ない。中には又一刻も早く危險を脱したいとあせる一念から、小さな漁船やヨットを仕立てゝ漕出して來るのが澤山ある。いくら海峽の狹い間だとて、あの潮流の急な、浪の高い中を、雨には打たれ次第、潮には揉

まれ次第でやつて來てはたまつたものでない。況やオスタンドから此處まで二十時間を費して、其の間一斤の麵麭も食はず、片時も横になつて睡ることが出來ぬに於てをやである。

十五日の正午に着いた汽船ケニルウォース號の如きは、能くこれで航海が出來たと、觀る者をして手に汗を握らせた。此の船が棧橋に着いたのを見ると、船底に積荷がない爲船足が浮上つて、後の推進機が半分ほど水の上に出てゐる。それでゐて、甲板は言ふに及ばず、倉庫・石炭庫などいふ船の上部は一杯の

人である。甲板の上に吊した端艇の中にさへ、人がうぢやくしてゐる。定員千五百名といふ所を、調べて見ると三千二百六十三人あつた。こんなに頭だけ重くなつた船を、顚覆もさせずに此處まで操縱して來た船長の手腕には皆舌を卷いた。かう大勢がつめこんだのだから、オスタンドを出てから十七八時間、一同喰はず呑まずは愚、眠りも坐りも身動きも出來ない。全く正眞正銘に立盡したのである。出港早々港務部に宛てた船長の第一の報告が、「飲料水皆無。」といふのであつた。乘客は大部分百姓で、其

の又大部分が女と子供であつた。此等が石炭に汚れ、雨に濡れそぼちながら甲板の上に慄へて居る樣は、二目と見られた光景ではない。是がオスタンドを出た最終の船であつたといふ。「あれを見せたかつた。」と、ハートレー君が茶を啜りながら言ふ。

四 白耳義の落人 その二

ハートレー君との話がつゞく。

白耳義から逃げて來る者の中にも、多少の金があつて宿料位の拂へる者は、孰れも此のフォークストン

に居殘りたがる。海一つ隔てたきりで日夕故鄕と相對して居るのが、せめてもの心の慰と見える。是が爲に此の狹い町の中のホテルは盡く滿員になつて、後から來た者は泊る處がない。一時避難民の逃げ盛つた頃には、宿屋・下宿屋は言ふに及ばず、素人屋までがお客で溢れて、折角遙々と英吉利に着きながら、夜の二時・三時頃まで宿を探し歩かなければならなかつた。金のない者や、思切よく諦をつけた者は、多くは一夜をこの波止場にあかした。それが獨身者でゞもあることか、老人を連れたのもある、乳呑兒を抱へたのもある。乘船以來全く何も食はずに居る者もある。殊に不便なのは食に飢ゑた幼兒で、此等が側の人の何やらん食ふのを見て、羨ましさうに其の方を見つめて、ほろりと涙ぐんでゐるのを度々見受けた。誠にこれ此の世ながらの餓鬼道の苦みである。

子供と言へば、憐な話が澤山ある。亂暴な獨逸兵が何時押寄せるか知れぬといふので、手に持てる限の家財調度は毛布や肩掛に包んで持出したが、着物は銘々皆一番上等の、取つて置きの一帳羅を着て出た

ものである。　大人はさほどに目立たぬが、子供は皆ちと身分に似合はぬ程の小ざつぱりしたのを着て居る。　處が、子供の方では、國亡び家喪はれて國外に落行く果敢なの旅ぞとも知らずに、滅多にない綺麗な着物を着せられたから、お祭にでも出掛けるやうに嬉しがつて家を出た。　此の喜び勇んだ子供を引連れて、前途の見込もつかぬ旅路に出掛けた親心は推察するに餘りある。

とぼ〳〵と大きな荷物を抱へて、車も馬もない道を何哩となく歩いた。　やつと船着場に着いたが、出る船も出る船も滿員で、中々乘込めぬ。　船には乘れず、食ふ物には事を缺く。　其の上昨今此の邊では、時雨のやうな冷たい雨が降つては止み、止んでは降る。引返しもならねば、出掛けることも出來ぬ。　雲霞の如く詰めかける避難民の雜沓の中に、押されつ揉まれつして、日を暮し、夜を明す。　船が愈滿員、締切となつて、そろ〳〵波止場を動き出した時、取殘された者の失望落膽の樣は、全く目も當てられぬ。　中には甲高な聲で悲鳴をあげる女もある。　又、絶望の餘り少し自暴氣味になつて、せめては此の子供だけでもと、

今しも動き出した船の甲板目がけて海岸から幼兒を投込んだ女さへあつた。

かくて一夜待ち二夜待つて漸く船に乘る。其の又乘込む時の騷は非常なもので、まるで一大修羅場だ。男は毆りあひを始める、女は引つ掻き合ふ、子供はわいわいと泣く。船員が聲を嗄らして制しようが、警官が眼を瞋らして叱りつけようが、何の利目もあらばこそ、孰れも死物狂になつて、われ一と船に入らうとあせる。しかも足場を取附けぬ中からどうと押寄せるので、群集に押されて、我知らず海に落ちた者

もある。かほどまでにして命からゞ〳〵船に乘り得たればとて、載せられるかぎりの人數を定員も何も構はず載せたことゝて、寢床もなければ食物も十分には行屆かぬ。雨露を凌ぐ設備さへないがちである。此の苦しい船路を、二十時間・三十時間と我慢して初めて英吉利に着いたころには、身も心も疲れ果てゝ、口もろく〳〵利けず、手足も自由に動けぬものがあるさうだ。

兎角して船に乘つて英吉利へ逃げのびた者はまだ仕合の方で、陸路和蘭方面へ落ちた者に至つては、て

くてくと何十哩といふ間を、荷物を抱へ、子供を連れ、老人を扶けながら、ひたもの歩いたのである。アンウェルスの落ちる前後には、此の種の落人が、和蘭街道を端から端まで何萬人といふ人數で、押合ひへし合ひ、目白押に詰めかけた。それが殆ど悉く前に言つたやうに取つておきの一帳羅を着飾つたのだから、氣の毒な中にも一種の奇觀であつた。雜沓と倉卒の折柄とて、親子互に見失つたものや、夫婦各別れ別れになつた者などは其の數を知らぬ。先になつた者はせめてものしるべにと、國境界隈の壁や石垣に名前を書きつけて居所を知らせようとする。後になつた者は、あれかこれかと、此の何百何十といふ落書をたよりに、親の行方、妻の所在を捜さうとする。容易に見つかりさうな筈はない。偶には親戚の者の筆蹟を見つけて、滿面に喜色を湛へて喜び勇んで駈出すのもあるが、多くは見つけ損ねて失望落膽の太息を吐いてゐる。幼兒を大勢連れた婦人などが、夫を捜しあぐんで、殆ど取り上せてゐるのがある。それとも知らず、子供は父さんは父さんはと母にせがむ。その父さんを捜しあてた處が、今宵の宿が定

まつてゐるではなし、夕餐の支度が調つてゐるでもない。かくて見も知らぬ遠き旅路の草枕、夜なく夢は故國の山河をめぐるであらうが、哀しいかな、國亡びて山河なし。リエーヂも、ルゼンも、アンウェルスも、皆ハン族に破壞されてしまつた。（「戰に使して」に據る）

五　樂　地

幸田露伴

如何なる處にも樂しき地はあるべし。又如何なる處にも樂しからぬ地あるべし。花笑ひ、鳥歌ひ、天長閑かに霞み、水緩かに流るゝ春の日に當りても、心よき事のみ懷に滿つべくはあらず。朝の曇には雨を疑ひ、夕の風には寒に怯ゆることもある例なり。雪雲の日を障へて暗く、大地凍りて土に生色なく、人畜共に萎え屈む冬の時に當りても、うら悲しき事のみ胸を塞ぐといふにもあらず。或は水仙の一二輪に清き優しさを感じ、或は暮鴉の三四聲に寂びたる趣を覺え、木の根焚く山家の爐のほとりに罪なき話の興を涌かし、ぬく灰はたく煨芋の煖かきに笑むをかしさもあるべし。金殿玉樓にも樂しからぬ折はあるべく、茅店草屋にも樂しき處はあるべし。

事物は大凡只一向ならぬものなれば、いとく樂しからぬが中にも、樂しき處、樂しむべき處もあるべければなり。樂しき處、樂しむべき處を見出し得ば、如何ほど窮苦不快の中に在りても、人は自らに勇氣を得て、苦中の苦に堪へ忍び、やがて人上の人となり得ることもあるべし。さなきまでも、樂しからぬが中に樂しき地を見出さんことを常に心がけて其の習慣を我が身につくる時は、朝夕に心も潤く氣もゆたかになりて、おのづから人品も宜しくなり、分別も正しくなり、世をば樂しく過すやうにもなるべし。樂

地を見出すべし。努めて樂地を見出す習慣を身に賦せんと心がくべし。

昔、江州の行商人と他の國の行商人とが共に碓氷の坂路を登り行きける折、夏の日の烘るが如く熱きに、商ふ品の嵩高く重かりければ、二人とも憊れ苦しみて憩ひけるが、苦しさの餘に、江州のならぬ商人、「碓氷の山の今少し低くもあれかし。身すぎの道に苦しからぬはなけれど、かばかり高く峻しくては、行商を廢めて歸り去らんとしも思ふなり」と溜息つきて歎じけるに、江州の商人打笑ひて、「坂も同じ坂なり、荷も

同じ程なれば、御身の苦しむほどは我もまた苦しみて、かく息も喘ぎ、汗も流るゝなり。されども我は然おもはず。此の碓氷の山を十程も重ねたる高き山もあれかし。さらば數多き行商人は、皆半途より身も憊れ心も弱りて歸り去るべし。其の時、我一人如何にもして山の彼方に到り、思ふがまゝに商賣して見んとは思ふなり。碓氷の山の高からぬこそ口惜しけれ」と云ひけりとぞ。同じ苦難の中に在りてもよく樂地を觀るものは、身撓んで心撓まず、力衰へて、勇衰へず。一路兩人、一境兩狀、よく〳〵思ひ味はふ

鞆の浦　備後國沼隈郡鞆町。

べきなり。（洗心錄）

六　小早川隆景

新井白石

天正元年、義昭將軍、織田信長のために京都を逐はれ給ひて、毛利を賴ませ給ひしかば、備後國鞆の浦に迎へ奉り、よきにかしづき奉る。

信長安からぬ事に思ひ、同じき五年のころほひ、毛利と織田との軍起り、羽柴筑前守秀吉大將を賜はり、まづ播磨の國を打從へ、備後の國を始めて因幡・伯耆の國人等を降し、同じき十年の春備中國に攻入り、冠・河

高松 備中國吉備郡高松村。

屋等の城を落し、高松の城を攻む。輝元・元春・隆景八萬餘騎を率ゐて後卷せんとて打出づ。信長の軍勢また雲霞の如く攻下ると聞えしかば、毛利の人々相謀り、備中・備後・伯耆三箇國を信長にさき渡し、中直りすべしとて、秀吉に使立てて、永く兩家の好を結ぶべきよしを言送ること度々に及ぶ。

小早川隆景（安藝佛通寺藏）

かゝるところに、同じき六月二日、信長、明智が爲に失

はれ給ふ由、秀吉の陣に聞ゆ。秀吉ちつとも包まず、毛利が使に向ひ、

織田殿既に逆臣の爲に討たれ給ひぬ。かくても猶、輝元が秀吉と好を結ばんこと初より聞く所の如くにやあらん。今は又違ふことやあるべき。汝疾く歸りて此の由を語り、汝が主の思はんやうをきつと承りて來れ。其の上にてこそ返答には及ぶべけれ。

とて歸さる。

輝元宗徒の人々を召集めて、此の事を僉議す。

當家信長にこそ中直らんと云ひけれ、秀吉が爲にあらず。信長忽ち討たれしこと、偏に當家の幸なり。ひとまづ本國に引返し、世の成行かん樣を御覽ずべうもや候らん。

と、皆一同に申しけり。

小早川左衞門督これを聞きて、

隆景存ずる所、人々の議に同じからず。抑本朝の兵革しきりに動きてこゝに百餘年、天下の亂すでに極りぬ。世また泰平に屬すべき期やゝ近きにあり。此の時に當つて、自ら天下の權を握り、海内

の亂を攘ふべき人などか無かるべき。此の年頃、かの秀吉の振舞を傳へ聞くに、其の事もし此の人にやありぬべき。さればこのたび信長が死せし事、秀吉の身に取つては深き禍には似たれども、これしかしながら、天下此の人に歸しぬべき時已に至りぬと覺ゆるなり。廣く此の人の振舞を論ずるまでも侍らず、今兩家好すでに成らんずる時に臨みて、たゞ尋常の心ならんには、如何にもして信長が死を深く隱し、堅く盟を結びて後にこそ其の事をも披露あるべけれ。それにかく眞直に申し

送る條、甚だ以て不敵なり。然るに今初の言葉に引きかへて、秀吉と中違したらんには、永く兩家の仇を結び、我が家遂に彼が爲に亡びんこと遠き日にあるべからず。只この儘に中直りして、前途後榮を此の人と共に期し給ふに若くべからず。

と、餘儀もなく申されしかば、福原越前守廣俊、秀吉の陣に行向ひ、信長の死を弔ひ、和睦の事變ずべからざる旨、輝元を始とし、吉川・小早川の人々皆起請文を送られたり。秀吉大いに悅んで、「此の好永く變ふる事あらじ」とて、これも起請文書きて賜ひけり。

息栖　常陸國鹿島郡息栖村。

小見川　下總國香取郡小見川町。

此の上は逆徒速に誅伐あるべしとて、明くれば六月六日、秀吉備中を立つて都に赴く。輝元やがて秀吉に加勢して、叔父藤四郎元綱に桂民部大夫附けて、人質にぞ出されける。程なく明智亡び、天下遂に秀吉に歸せし事、隆景の思ふに違はず。（藩翰譜）

七　利根川の秋曉

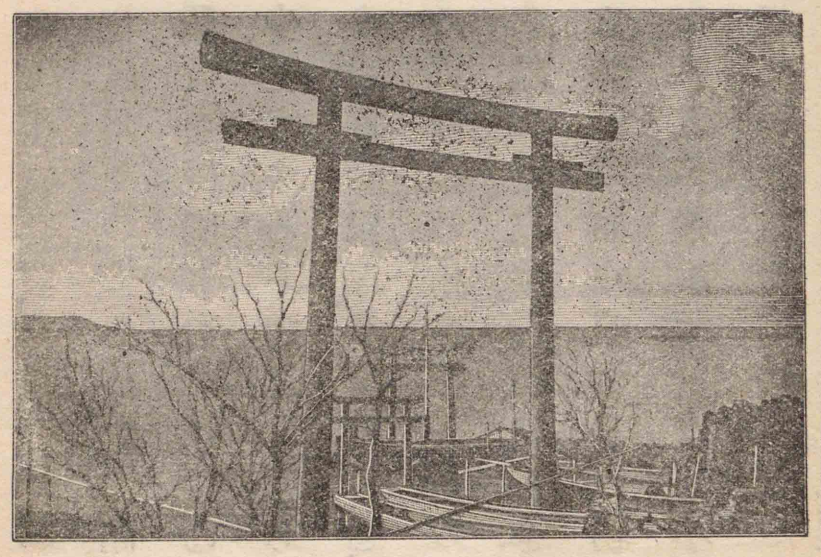
徳富蘆花

先年の秋十一月の初ごろ、利根川の左岸の息栖と云ふ處に泊つた。（息栖）此處は北浦の末流が利根の本流と落合ふ處で、川幅が濶く、對岸の小見川までは小一里

もあらう。宿はすぐ水邊で、夜半に眼をさますと、櫓の音がぎいくと枕頭に聞える。翌日、黎明に起きた。宿の者はまだ寢て居る。そつと戸を明けて河邊に出ると、其處に薪が積んである。霜を拂つて腰をかけた。天地はまだほの暗い。空も河面も茫として鉛色であつた。裏の方の暗い小屋の中で、雞が勇ましく曉を告げると、餘程たつて、川向の方から、いかにも微かな雞の聲が聞えた。大河を隔てゝ呼びかはす此の雞の聲は實によい。チェルシーの賢とコンコルドの哲とは實に此の如く大西洋を隔てゝ

チェルシーの賢　カーライル。英國の文學者。(1795—1882)

コンコルドの哲　エマーソン。米國の文學者。(1803—1882)



息栖神社大鳥居

呼びかはしたのであらう。自分の眼には、曉は此の兩岸の雞聲の間から川面に涌きあがつて來る樣に思はれた。暫くすると、小見川の方の空がぼうつと薔薇色になつて來た。と見ると、川面も淡紅を流して、ほやりく水蒸氣が見

えて來た。實に迅い。瞬をする間もないのである。夜は川下の方へ流れて、曙の光は四邊に滿ちてゐる。雞はなほ鳴きつゞけてゐる。空と水との薔薇色が少しうつろふ。忽ちきら〳〵とまばゆき光が水にうつる。振返つて見ると、朝日は杲々として今息栖の宮の森の梢を離れたのである。折柄その森の塒を離れた烏が一羽、朝日を負うて、さながら曉を告渡る神使の如く、凛とした朝の大氣に羽を搏つて、小見川の方へ飛んで行く。小見川はまだ蒼々とした朝霧の中に眠つて居る。

對岸はまだ眠つて居るが、こちらの村は最早覺めた。うしろの小屋から煙が立上る。今棚を出た家鴨は足跡を霜につけて、くわつ〳〵と呼びながら、朝日を碎いて水に飛込む。水楊の枝に小鳥が囀る。今起きて來た村人が白い息を吹き〳〵川に下りて、河水を掬んで口を嗽ぎ顏を洗ひ、それから遙に筑波の方へ向いて、掌を合せて拜んで居る。「あゝ、實に好い拜殿である。」と自分は思つた。（自然と人生）

八　富士雪を帶ぶ

徳富蘆花

富士雪を帶ぶ、さやかに雪を帶ぶ。

秋空何ぞ高き。風威を帶ぶる相模灘の怒號何ぞ壯なる。此の空と此の海との間に、玲瓏として立つ富士の秀色を見ずや。

絶頂より五合目のあたりまで、銀より白き雪は桔梗色の山膚を被ひて、上は隈なく、下はさながら笹緣とれるやうに山を包めり。雪色淸うして點塵なく日光に輝き、水よりも澄める秋の空に襯し、豆相の連山を踏み、萬波雪の如く立騷ぐ相模灘を俯瞰して、秀麗皎潔、神威も十倍するを覺ゆ。

嶽頂一點の雪、實に富士の秀色神采を十倍せしむるのみならず、さらに四圍の大景に眼睛を點ず。東海の景は富士によりて生き、富士の景は雪によりて生く。（自然と人生）

九　水精の玉

幸田露伴

玻璨盌に　汲みて湛へし
玉川の　玉なす水に、
水精の　水なす玉を
そと入れて、　しづかに見れば、

蘆の葉の　白露墜ちて、
行く川に　痕無きが如、
水の中に　玉の影なく、
玉の前に　水の色無し。

○

濁なき　水と澄む世に
曇なき　玉と身は生れ、
相容るゝ　心すゞしく、
我が名も無くて　過してしがな。（東亞の光）

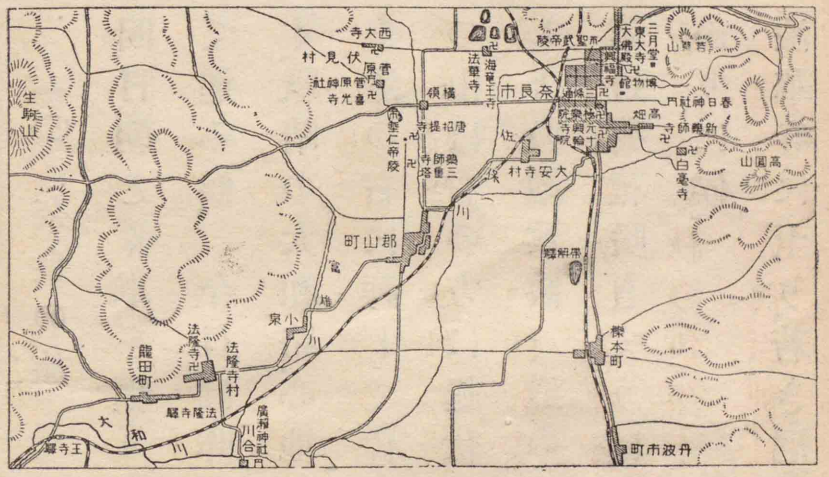
三條通　奈良市の大通。

一〇　奈良の旅

佐々木信綱

四日、朝とく車を驅りて三條通を生駒山に向ひて進み候。今日は昨日とかはりて空拭ふが如く、秋晴の大和路、心地よき限に候。聖武帝の陵を道の右に拜して佐保川を渡り候。佐保・佐紀の山は右の方に起伏して、春の花、秋の鹿、昔ゆかしき心地致候。道のほとり、小川の堤には、鈎鐘草・野菊花咲きて、うばらの實こぼれ、秋色今をさかりに候。

法華寺に至り、若き尼の案内にて、靜かなる本堂



奈良附近地圖

に奈良朝木彫の逸品たる本尊十一面觀音像を拜し候。千餘年の星霜に貴く物さびて、木地の色も淡黑きに、慈悲の御目ざし生けるが如き御姿尊く拜し候。

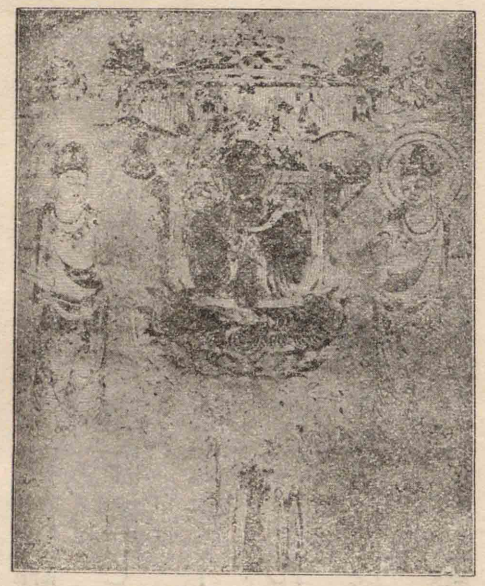
海龍王寺の門を入るに、百舌の聲頻に聞え候。顧みれば興福寺の塔、大佛殿の屋根、木の間に高く聳え、眺め言ひしらず候。數町にして道の左なる田野の中に大極殿の遺址有之候。そのかみの礎石を殘せる芝生に立ちて靑丹よし奈良の都の壯觀を忍べば、懷古の感に堪へず候。草の葉隱れに黃なる花、白き花咲きて、蟋蟀の音もあはれに聞え候。

次に訪ひしは西大寺に候。四天王像の拜觀を乞ひて臺所に入れば、箕に盛りたる柚の實の黃なるにも秋の色深く相見え候。名も懷かしき伏見の里に菅原神社に詣で、畑中の古堂喜光寺

の孤影悄然たるを見ては、一入のあはれさを覺え候。垂仁帝の陵を右に拜して過ぐるに、池中に島なせる田道間守の奥つきのあたり、鴨數多遊べるが眼にとまり候。唐招提寺は甍の上の鴟尾に日影耀きて、松の雫の落つる音も寂しく聞き候。栗皮色の袈裟着たる僧に案内せられて、金堂・講堂を見候。藥師寺にては、け高き本尊の藥師如來並に雄麗なる三重塔に一入の莊嚴を味ひ申候。又、佛足石の歌碑は奈良時代の和歌の物に彫られて現存せる唯一のものなれば、

殊に目にとまり候。

郡山より汽車に乘りて法隆寺に到り候。金堂・講堂をはじめ、綱封藏・五層塔など見めぐり候。今更にいふまでもなき貴重なる古美術の中にも、寂たる歩廊の石だたみを踏んで千餘年前の壁畫に對したる時の感、殊に忘れ難く候。



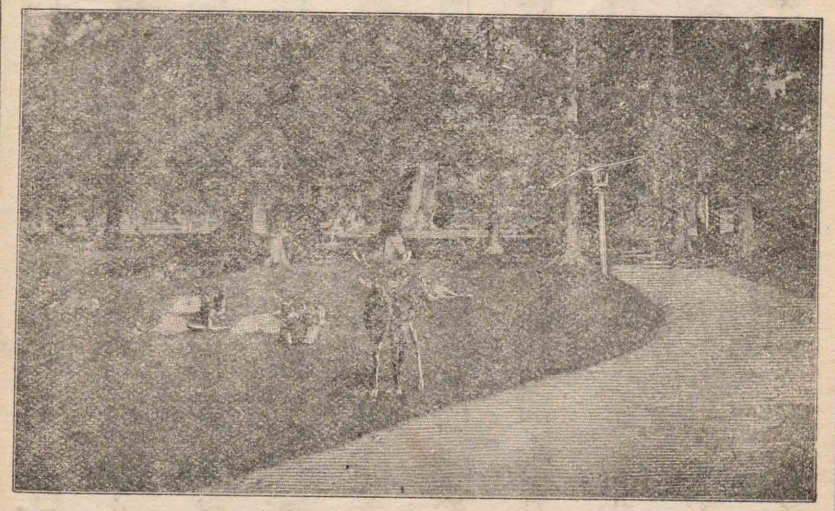
法隆寺金堂壁畫

法隆寺を辭して機織れる家多き村を過ぎ、から棹の音を聞きつゝ、とみの小川を渡り、更に又大和川を渡り、廣瀨神社に詣で候。　大演習行幸の前とて、しきりに道を直しをり候にも、此の大和國原に武をみそなはす今年の秋を、皇祖の靈も天がけり喜ばせ給ふらんと畏く覺え候。　再び汽車に投じて夕ぐれ奈良に着き候。　夜月明、杉の木立をわけて此處彼處と歩めば、我が身そゞろに昔の人になりぬる心地いたし、感興いはん方なく候ひき。

明くれば五日、また雨にて候。　極樂院・元興寺・十輪院等を見めぐり候。　高畠のあたり雨烈しく、とある家の崩れたる築地に蔦纏へる門内、ぬるでの梢の、紅葉せる蔭に暫し雨宿り致候。　やがて新藥師寺を訪ひ候。　茶の衣に木蘭の腰衣着けし老尼、物うげに案内致呉候。　十二神將の像は幾度見ても飽かず候。　門を出づれば薄・野菊雨に亂れ、畑を隔てゝ彼方に高圓山聳え、その中腹なる白毫寺の塔けぶり居候。

鹿群れ遊ぶ神苑を過ぎ、春日神社に詣でて巫女

が梅が枝を舞ふを見候。いつ見てものどけくみやびやかなるに、夢見るごとき心地致候。雨晴れて冬枯の色寂しき若草山のもとを經て三月堂に至り、此處に天平美術の精髄ともいふべき諸佛像を見候。祕佛



春日神社の神鹿

と崇められたる執金剛の雄健壯麗なるは殊にすぐれて覺え候。大佛殿の鐘樓に例の鐘をつき試み、修繕中の大佛殿に詣で、さて博物館を見候。陳列の品々何れ優秀にして貴重ならざるものなく、げに我が國古美術の粹を萃めたるものと申すべく候。

博物館を出でて、こゝに此の度の大和めぐりを了へ候。樹陰に憩ひて暫し我が奈良朝の文明を憶ひ、一轉してわが萬葉集に想ひ到り、かくの如き大和の自然を舞臺とし、當時の國民精神を

如實に傳へたる我が萬葉集の意義と價値との返すがへす大なるものあるを感じ候。（文と筆）

室鳩巣
名は直清。徳川幕府の儒官。（一六四一―一七四九）

伊豫守
松平忠昌。徳川秀康の次子。（一三五七―一三〇五）

一一　杉田壹岐

室　鳩巣

寛永の頃、越前故伊豫守殿の家老に杉田壹岐といふものあり。もとは足輕なりしが、其の身の材をもて微賤より登庸せられて、厚祿を受け、國老に列しけり。壹岐性忠亮にして、骨鯁なり。常に顏を犯し直言して、君の過を匡救することを忘れず。

或時、伊豫守殿在國にて鷹狩し、晡時に及んで歸城あり。家老どもいづれも出迎へしに、伊豫守殿ことのほか氣色宜しく、「今日若ものどもの働いつにすぐれて見えつ。あれにては萬一の事ありて出陣すとも、上の御用に立つべしと覺ゆるぞかし。その方どもも承りてよろこび候へ。」とありしかば、家老どもいづれも「御家のため何よりめでたき御事にて候。」といひけり。

この時、壹岐は末座にありけるが、獨り默々として居たりしを、「何とか云ふ。」と暫く見合せられしが、こらへかねられ、「壹岐は何と思ふ。」と仰ありしに、壹岐「只今の

御意承り候に、憚ながら歎かはしき御事に存じ候。
當時、士ども御鷹狩の御供に出で候とては、先にて御手討になり候はんも計り難く候とて、妻子と暇乞して立別れ候と承り候。　かやうに上を疎み候うて思ひ附き奉らず候うては、萬一の時御用に立つべしとは存ぜず候。　それを御存じなく、たのもしく思召さるとの御意こそ愚なる御事にて候へ。」といひしかば、伊豫守殿大きに氣色損じけり。
何某とかや云ひしもの、伊豫守殿の刀持ちて側に居たりしが、壹岐に「座を立ち候へ。」と云ひしを、壹岐聞き

て、其の人をはたと睨み、「いづれもは御鷹野の御供して鹿・猿を逐うて駈廻るを御奉公とす。　此の壹岐が奉公はさにてはなし。　いらざる事申し候な。」とて、そのまゝ脇差を拔いて後へ投捨て、伊豫守殿の側に進み寄り、「只御手討に遊ばされ下され候へ。　空しくながらへ候うて、御運の衰へさせ給ふを見候はんよりは、只今御手にかゝり候はん方遙に勝り候ひなんず」といひて、頸を延べて平伏しけるを見給ひて、何ともいはで奥へ入られけり。
其の跡にて、外の家老ども壹岐に向ひて、「御爲を思ひ

て申されしは尤にて候へども、折もあるべき事にて候。今日御鷹野より御機嫌にて御歸ありしに、御氣先を折られ候ことは、遠慮もあるべき事にこそ」といひしを、壹岐「君へ諫を申上げ候に御機嫌を考へ候うては、よき折とてはなきものにて候。今日はよき序とこそ存じ候へ。其の上、某事は御取立のものにて候へば、各とはわけの違ひたるものにて候。御手討に逢ひ候うても其の分の事にて候」と云ひければ、家老ども皆々感じ合ひけり。

やがて家に歸りて、切腹の用意して君命の下るを待

ちけるが、日比糟糠の妻のありけるに向ひて、「御身に言ひ置く事、たゞ一つ侍り。御身は女の身なれば、直に御恩を受けたるにてはなけれども、わが御厚恩を荷ふ故に、足輕の妻といはれし身が、今歴々の妻とて、大勢の所從に圍繞せらるゝは、限なき御恩にあらずや。されば、われ生害仰せ付けらるゝ跡にても、只朝夕今まで御恩のありがたかりしことを忘れざれ。假にも上を怨み奉る心あるべからず。若し女心にて我が身の物うきにつけて、上を怨み奉る樣なることを言葉の末にも露おきなば、黄泉の下までも深く

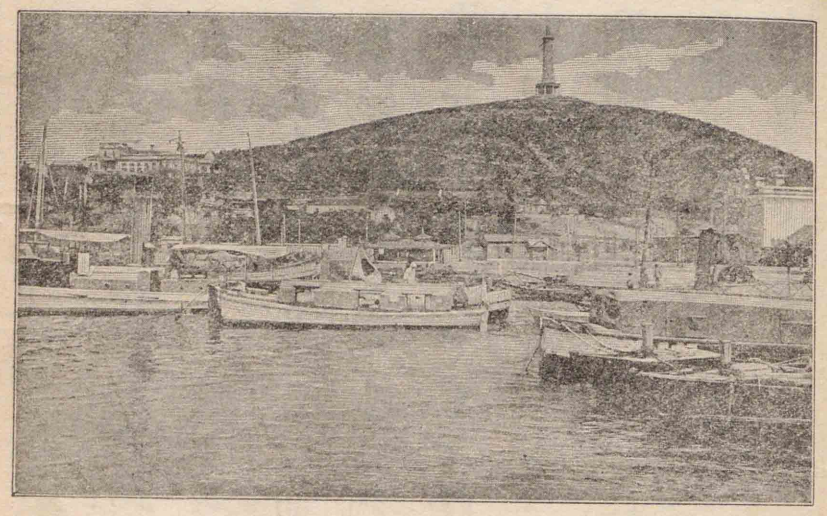
怨と思ふべし」とぞいひける。

さて今かくと待ちけるに、夜ふくる程に人來て門を叩き、「召あるまゝ登城すべし」となり。さてこそと思ひて登城しけるに、すぐに寢所へ召入れ、「其方が書言ひし事心にかゝりて寐られぬ間、夜陰なれども呼びつるなり。我があやまりたる事はとかく言ふに及ばず、其方が志を深く感じ思うて滿足するぞ」との事にて直に腰の物を賜ひしかば、壹岐は思ひも寄らぬ事とて、覺えず落涙に咽びつゝ、賜を拜して罷出でけりとぞ。（駿臺雜話）

一二　忠魂塔

一面に小松を植ゑちらした白玉山を電光形にぐんぐん登つて表忠塔下に來た。海拔四百八尺、新舊市街の中間に聳え立てる此の山の頂からは、旅順を一目に見晴し、東には茫々たる海を眺め、忠魂塔の建立場としては、げに絶好の位置である。遠望すれば、巨大な白蠟燭を山上に突立てた樣な此の塔は、下を花崗石、上をコンクリートにして、高さ二百十五尺、如何にも美しい燈臺式の記念碑で、塔頂に電燈がつくと、

十數里の海上から見えるといふことである。塔内は十階になつて、階段を踏んで登れるのだが、今日は時刻が晩いため、登れなかつた。塔下の小苑に金盞花の赭黄ろい花が、まだ霜枯れず咲いて居る。表忠塔を背に、平たく削りならされた山頂を北へ歩いて鳥居をくゞり、石段を上り、納骨祠に詣でる。白玉山の北端に石垣を四角に築きあげ、上に小さな石造の祠が南面して立つて居る。白玉神社といふさうな。旅順を落す爲に命をすてた海陸軍人二萬二千七百餘の白骨が此の下に埋められてあるのだ。



忠魂塔

何時しか落ちかゝつた日は紺色の雲の間から生々した血の色を見せて居る。と見れば、我等が立つ白玉山を繞る旅順界隈の山又山、狐の皮の如く霜枯れた裸山、破壞された砲臺の山、生命の去つた荒寥たる山山は、雲間漏る落日のために赫として茶褐色に燃え

切つた空氣の中に、毒々しい程はつきりしたパノラマを現出した。其處に一發の砲聲も響かず、一聲の人語も聞えぬ。風すらも吹いては居らぬ。自然は鳴をしづめて居る。而して其の强烈な色彩を以て旅順の山河は今叫喚をあげて居るのだ。十年前、二十年前、二度までも人の子を殺し合ふ修羅場となつて溺るゝ程に血を浴び、嘔くまでに血を飲まされた旅順の大地は、今夕陽に血を吐返し、死の苦みを苦しみもがいて居るのだ。息もつまるばかり凄慘の氣に打たれて、やゝ久しく納骨祠畔に佇む。

血を吐く瀕死のもがきは、やがて蒼ざめた死の黃昏に移つた。外套の襟を立てゝも、ぞく〳〵する程空氣は冷えて來た。でも、まだ去りもやらずそこにたたずむ。

背後にものゝけはひがする。牽かるゝやうに振りかへる眼を、ぱつと天來の光が射る。表忠塔が光り出したのである。

「あゝ、光が。」

ほつと息ついて、塔を見上げた。二百十五尺の白塔の上、くるりとついた電燈は、白い光の環をなして中

空高く瞬きつゝ、地よ望め、海よ仰げと、黄昏の空に耀いて居る。

その光はそも何を宣るか。「不死」でなくてはならぬ。

「不死」。

白骨よ、眠れ。大地よ、默せ。光は死なぬ。死なぬものが光る。光は最後の勝利者である。

いさゝか慰められて納骨祠に別れる。

（「死の蔭に」に據る）

一三　海軍戰死者ヲ祭ル

東郷平八郎

東郷平八郎　元帥海軍大將。大勳位。伯爵。（一八四七―一九三四）

海陸ノ戰雲已ニ散ジテ、滿都ノ和氣藹々タリ。童幼歡ビ迎ヘテ、六親門ニ待ツ。是、諸子ト生死ヲ共ニシタル將卒ガ、大纛ノ下ニ凱旋セル頃日ノ光景ナリ。

回想スレバ、諸子等ガ冱寒ヲ冒シ、炎熱ヲ凌ギ、勁敵ト戰フニ方リテヤ、戰局ノ前途ハ猶未ダ知ルニ由ナク、諸子ノ逝ク毎ニ、マヅ其ノ忠死ノ榮ヲ得タルヲ羨ミ、我等モ亦必ズ諸子ニ倣ウテ君國ニ報ユルヲ期セリ。

然ルニ諸子ノ勇戰奮鬪ハ常ニ其ノ結果ヲ奏シ、皇軍戰フ毎ニ勝タザルコトナク、旅順ノ連陣十閱月ニシテ大勢ヲ定メ、日本海ノ鏖戰一舉ニ勝敗ヲ決シ、爾後

海上敵影ヲ見ザルニ至レリ。是、固ヨリ無量ノ皇德ニ基ヅクト雖モ、又諸子ガ身ヲ外ニ忘レテ奉公シタルノ致ス所ナラズンバアラズ。今ヤ征戰其ノ終ヲ告ゲ、我等凱旋ノ將卒四顧歡喜ノ光景ヲ見ルニ當リ、諸子ト此ノ悅ヲ頒ツ能ハザルヲ懷ヒ、悲喜交〻至リテ、感慨言フベカラザルヲ覺ユ。然レドモ帝國ノ今日アルハ、卽チ諸子ガ一死ノ榮アル所以ニシテ、諸子ノ忠烈ハ永ク我ガ海軍ノ精神ト爲リ、帝國ヲ無窮ニ守護スベシ。茲ニ典ヲ擧ゲテ諸子ノ靈ヲ祭リ、聊カ懷ヲ陳ベテ弔詞ニ代フ。尙クハ來リ饗ケヨ。

遲塚麗水
名は金太郎。新聞記者。（一三六一）幼沖の天子安德天皇。

明治三十八年十月二十九日

聯合艦隊司令長官　東鄕平八郎

一四　赤間關

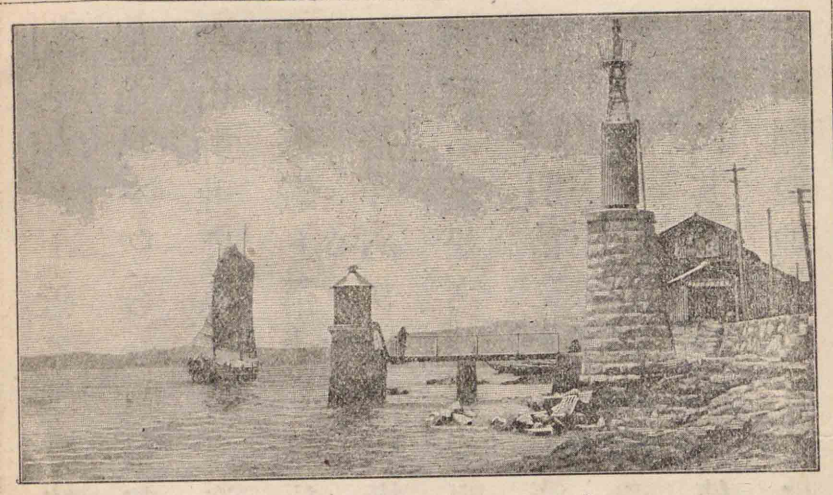
遲塚麗水

幼沖の天子龍宮に入り給ひてより茲に七百年、舊によりて山は靑々の容を變へず、水は蒼々の色を改めず、更に一新繁華を添へ來りて、豐の門司と共に中國・九州の咽喉を扼し、西國の一大埠頭となりしもの、是を赤間關となす。

所謂壇浦は、市の東、壇浦町の邊數町の海濱なり。浦

は後に山を負ひて漁家蜑戸參差相望み、潮聲寂寞として岸を打ちて回る。御裳濯川は壇浦に注げる小流なり。岸に沿うて老松多し。此の邊の海濱巽蟹を產す。甲の上の皺恰も人の憤怒の惡相を作す。更に小平家と稱する魚あり。呼んで平家蟹といふ。形鯛に肖て、金鱗の上に白斑あり、雪の如し。甚だ美麗なり。俗に云ふ、平家の亡靈、男子は化して蟹となり、女子は化して小平家となると。

赤間宮は阿彌陀寺町に在りて安德帝を祀る。もと阿彌陀寺の在りし處。社殿宏壯なり。陰曆三月二



御裳濯川附近

十四日大祭を行ふ、呼んで先帝祭といふ。安德帝の御陵は赤間宮の左に在り。

凡そ此の邊、紫石山を負ひ、海門を前にす。猿啼・潮聲兩つながら腸を斷つ。紫石山の下に平家一門の墓あり。兩行相望み、風打雨淋、勒字を辨ぜず。紫石山に登れば、硯の海脚下に在り。直に豐の門

司と相對し、近く筆架峰を看、右に内裏・新羅崎・百濟野。嚴流島を望む。風景甚だ佳なり。

龜山神社は外濱町の邊に在り。左右に蘇鐵樹あり、朝鮮蘇鐵と稱す。豐公手栽のものといふ。社に近く引接寺あり、長州屈指の巨刹たり。寺内に笠松と稱せる老松あり、枝葉四方に蜿蜒し、青繖を張れるが如し。明治二十八年清國講和使李鴻章の旅館に充てたりしより、彼の撙俎折衝の場たりし旗亭春帆樓と共に、其の名全國に傳はれり。

赤間關の地、太古は正に九州と一地峽をなし、玄海より硯の海に至る天然の一大石橋を作りきといふ。長街帶の如く波光に涵し、面々の青山萬檣を護る。文字關頭夕暉紅なる處、豐山は濃、筑山は淡、遙に豫州の山嶂の煙紫雲翠幾重々なるを看る。誠に佳矚とす。（日本名勝記）

國木田獨歩
名は哲夫。文學者。（一八七一―一九〇八）

一五　武藏野

（イ）たゞ文章

國木田獨歩

昔の武藏野は目のとゞくかぎり萱原であつたやうに言ひ傳へてあるが、今の武藏野は林である。林は實に今の武藏野の特色といつてもよい。林の木は

重に楢の類で、冬は悉く落葉し、春は滴るばかりの新緑が萌え出る。其の變化が秩父山脈以東十數里の野一齊に行はれて、春夏秋冬を通じ、霞に、雨に、月に、風に、霧に、時雨に、雪に、緑陰に、紅葉に、様々の光景を呈する。其の妙は一寸西國地方又は東北の者には分りかねるのである。楢の類だから黄葉する。黄葉するから落葉する。時雨が私語く、風が叫ぶ。一陣の風が小高い丘を襲へば、幾千萬の木の葉が高く大空に舞つて、小鳥の群の如く遠く飛去る。木の葉が落ち盡せば、數十里四

方に亙る林が一時に裸體になつて、蒼ずんだ冬の空が高く此の上に垂れ、武藏野一面が一種の沈靜に入る。空氣が一段澄み渡る。遠い物音が鮮かに聞える。自分は十月二十六日の日記に、「林の奥に坐して四顧し、傾聽し、諦視し、默想す。」と書いた。此の傾聽といふことが、どんなに秋の末から冬へかけての今の武藏野の心に適つて居るだらう。秋ならば林の中より起る音。冬ならば林の彼方に遠く響く音。鳥の羽音、囀る聲。風のそよぐ、鳴る、うそぶく、叫ぶ聲。叢の蔭、林の奥にすだく蟲の音。空車、荷車の、林を廻

り、坂を下り、野路を横ぎる響。蹄で落葉を蹴ちらす音、これは騎兵演習の斥候か、さなくば夫婦連れで遠乘に出かけた外國人である。何事をか聲高に話しながら行く村の者のだみ聲、それも何時しか遠ざかりゆく。獨り淋しさうに道を急ぐ女の足音。遠く響く砲聲。隣の林でだしぬけに起る銃の音。殊に時雨の音に至つては、是程閑寂なものはない。山家の時雨は我が國でも和歌の題にまでなつて居るが、廣い野末から野末へと林を越え、杜を越え、田を横ぎり、又林を越えて、しのびやかに通り過ぎる時雨の音の、如何にも幽かで又鷹揚な趣があつて、優しく懷かしいのは、實に武藏野の時雨の特色であらう。

自分は嘗て北海道の深林で時雨に逢つたことがある。これは又人跡絶無の大森林であるから、其の趣は更に深いが、其の代り、武藏野の時雨の更に人なつかしく私語くが如き趣はない。（武藏野）

一六 蘇武

坪内逍遙

風颯々の　秋ふけて、
吹きひるがへす　旅ごろも、

おもき君命　いたゞきて、
遠く匈奴の　國に入る。
野邊の草木や、　鳥のこゑ、
聞く物の音も、　見る色も、
いづれかえびすの　ものならぬ。
思へば遠く　來つるかな。
流れ行く水　音たてゝ、
胸に愁の　波高し。
故郷母あり、　雁鳴きて、
老の寢覺や　いかならん。

よしや幾夜の　草枕、
旅寢の空に　果つとても、
國家の爲に　盡すべし。
君命重く、　身は輕し。
かうと覺悟は　定まりぬ。
使命つぶさに　傳へつゝ、
匈奴の王に　面接し、
蘇武は國書を　呈しけり。
もとより非道の　王なれば、
國書の旨意は　聽かざれど、

單身敵地に
蘇武が勇氣を
ある時蘇武を
「降り仕へよ、
重く汝を
說き諭せども、
國王大いに
蘇武を捕へて
いはやの中に
食を與へず

使せし
惜みつゝ、
召しよせて、
しかあらば、
用ひん。」と
聽かざれば、
怒をなし、
荒山の
幽閉し、
苦しめぬ。

頃しも北風
寒さ膚を
飢うれば枯草を
いのちを繫ぐ
日數經れども
えびすら怪しみ
この度は蘇武を
羊のむれをば
「雄羊孕む
放免せん。」と

雪を吹き、
つんざけり。
雪に和し、
料となす。
死せざれば、
かつ怖れ、
野に移し、
まもらせて、
ことあらば
あざけりぬ。

覺悟はしても　無念さに、
眠られぬ夜も　幾たびか。

蘇武持節圖
（渡邊崋山筆）

一夜雲なく　月澄みて、
秋も最中の　空の色、
せめてはかくて　あることをと、

雁に託せし　筆の跡。
かくて春去り、　夏來り、
又秋の風、　冬の霜、
落葉々々の　重なりて、
十有九年　夢の間や。
老いて屈せぬ　忠節を、
天、助けてか、　不思議にも
雁の使の　かひありて、
樂しき便ぞ　聞えける。
國と國との　和議成りて、

蘇武は赦され　歸りしが、
立出でし時の　黑髮は、
いつしか雪とぞ　なれりける。（國語讀本）

一七　朔北瞥見

山岡熊治　陸軍歩兵中佐。旅順の役勸降使となりし人。

貝加爾湖畔、黑龍江邊、是ぞ我が失明中佐山岡熊治君が日露戰役前幾度か出沒したりし處なる。

「牧羊邊地苦、落日歸心絕、渴飲月窟水、飢餐天上雪。」是、李白の蘇武を詠ぜしもの。蘇武が漢節を持して十餘年間羊を牧したりしは、實に今の貝加爾湖畔の地なり。

露支國境の滿洲里（マンチュリア）驛より鐵路西に奔ること一千露里、曠野に飽き、森林に倦みて、氣秋に似たる旦、突如として貝加爾湖の碧きを見る、詩思動かざらんと欲するも得んや。

氷結せる貝加爾湖は天下の絕景なり。所謂貝加爾鐵道成りて、結氷湖上、截氷船の壯觀を失ひたれども、清絕なる湖色を十二分に味ひ得るは實に廻岸線の賜なり。

懸崖絕壁その脚を湖汀に浸し、碧山綠樹その影を漣

漪に映ずる處、所謂大西伯利鐵道の列車、日に幾來往して、遠く亞歐の間を聯絡す。

列車の湖邊なる一小驛に停まる時、或は車窓に迫る巖角の草花を手折り、或は歩を碧瑠璃の湖邊に運びて秋の氣に浴す。又長旅程上の一慰藉たり。

獨り此の好景に對して畫龍點睛を缺くの憾あるは、湖上に一帆をも浮べざること是なり。平原民族たるスラブの下層社會が終生魚の潑剌たるを知らざる、以て想ひ見るべし。

貝加爾南岸鐵道は日露役中の敷設にかゝる。旅順の勇士山岡中佐が戰前西伯利の遍歷に際して湖南車窓の秋月を賞し得ざりしは、今の中佐に於て特に憾たるべし。若し夫、シルカ河に沿へる支線に由りて黑龍江上流のスレチェンスクに達し、同江航行の定期船に客となりて、旬日、河上の人となるが如きは邦人の避暑旅行として蓋し理想的たり。

黑龍江の下航、スレチェンスクより東ハバロフスクに到る、江上實に一千三百五十九哩、日を要すること約九日。上船の夕、月眉の如く、船を棄つる夜、月既に圓なり。

黑龍江左岸の家は皆木造の矮屋にして、江上浮ぶる所の船は、所謂火輪船ならざれば則ち扁平の曳船のみ。 觸目皆是前世紀のもの。

夜氣甚だ冷かならんか、曉天必ず濃霧あり。 若し夫、江上一面濃霧の世界と化し、停船空しく數時間に及ばんか、船客・船員相會して互に談笑し、亦時間の空過するを意とするなし。 宛然是太古の景、太古の民。

夜に入れば、紅色の燈火は支那領の岸頭より輝き、白色の燈火は露領の巖角より到る。 吾等の汽船も亦紅綠の船燈を掲げ、兩岸の紅白燈を縫うて進む。 時

に淡霧低く江面を壓し、夜氣靜かに水に落つ。

船進んで松花江の會流點に到れば、江水遽に濁りて江幅優に四浬餘、汪洋たる江上、只濁浪白波の洶涌するを見るのみ。 (「世界を家として」に據る)

黑田清綱
樞密顧問官。
子爵
(一八四九—一九二六)

一八 やつかほ

やつかほの花のうつくしきかな

黑田清綱

藤原爲兼
鎌倉時代の公卿。歌人。
（一一九九―一二七五）

小出粲
明治の歌人。御歌所寄人。
（一二四九―一二九八）

香川景樹
江戸時代の歌人。
（一二四八―一二八〇三）

ときわなる宿をば月のあらかまて
あすの道ゆくよはのたひ人　　藤原爲兼

村雨のなくりの雲のゆくへ
そらさへにあふ峯のもみち葉　　小出粲

おほつかふ木ぬれのみゆる三日月も
ちるはうりなるこすゑのうき　　香川景樹

小澤蘆庵
江戸時代の歌人。
（一二五八―一二四六一）

春道列樹
平安時代の歌人。
（一二五九―一二九〇）

芳賀矢一
文學博士。東京帝國大學文科大學教授。
（一二五七―一）

月ちらくあらしみなきて山ふる寺の
さむき垣根の孤なくあり　　小澤蘆庵

きりのふとひたちとくらしてあすの川
なかれてはやき月のあらし　　春道列樹

一九　大禮拜觀

一入洛　　芳賀矢一

上田 東京帝國大學文科大學長文學博士上田萬年。
三上 同教授文學博士三上參次。

建國以來未曾有の盛儀、世界各國にも類例の無い大典に、參列者の一人たる光榮を辱うした余は、つくづくと此の時代に生れ遭つた幸福を思ひ、深く家門の譽を喜んで、九日の朝八時三十分發の特別急行車で、上田・三上の二氏と東京驛を出發した。沿道到る處の綠門・旭旗、思ひ〳〵の誠意を盡して鳳車を送り奉つた跡を眺めながら行く。日光に輝く遠近の紅葉も美しいが、見渡す限、秋風に浪立つ黃色の田は、十分な實りの色を示して居る。車中からみそなはして、如何ばかり御滿悅におぼしめしたかなどと恐察し

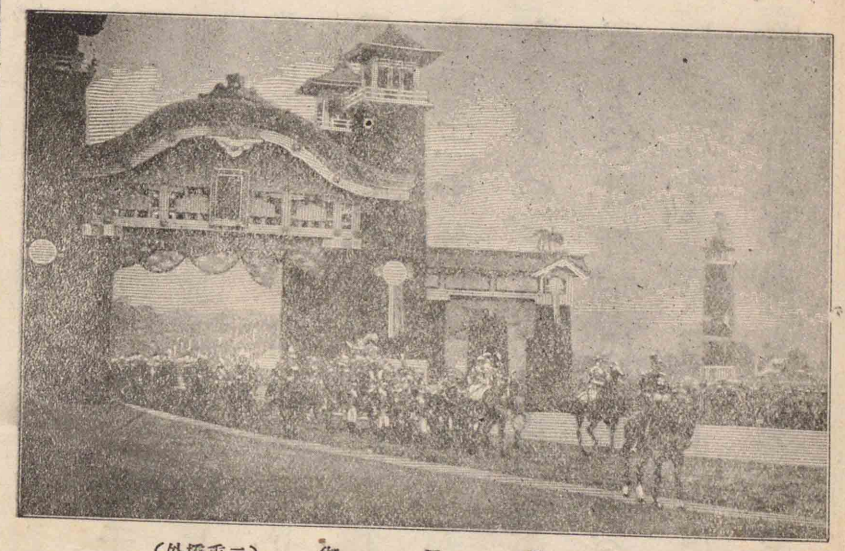
奉つて、

八束穗も垂穗に實る千町田哉

みそかはしつゝみゆきましぬん。

など口吟む。濱松あたりから小雨になつて、美濃路・近江路はいよ〳〵降りしきる。京都に着いたのは七時三十分。雨に濡れたイルミネーション奉迎門をくゞつて、余は堀川通の友人の許へ急ぐ。市中の家々には軒下に幕を張つて、一樣に奉祝の提燈が吊してある。提燈の上手に高く傘をかざしたのも一樣に揃つて、何となく優美な京都趣味を感じさせる。

福原氏
時の文部次官
福原鐐次郎。



鳳輦通御（二重橋外）

友人は三十年來の舊知である。こゝに宿を求めたのは同じく同窓の友たる福原氏で、三人鼎坐、一橋の寄宿舍生活、伯林の留學生時代などを語り合ふ中、夜はいたく更けた。福原氏は明日賢所大前の儀に威儀の本位に着くといふ大役

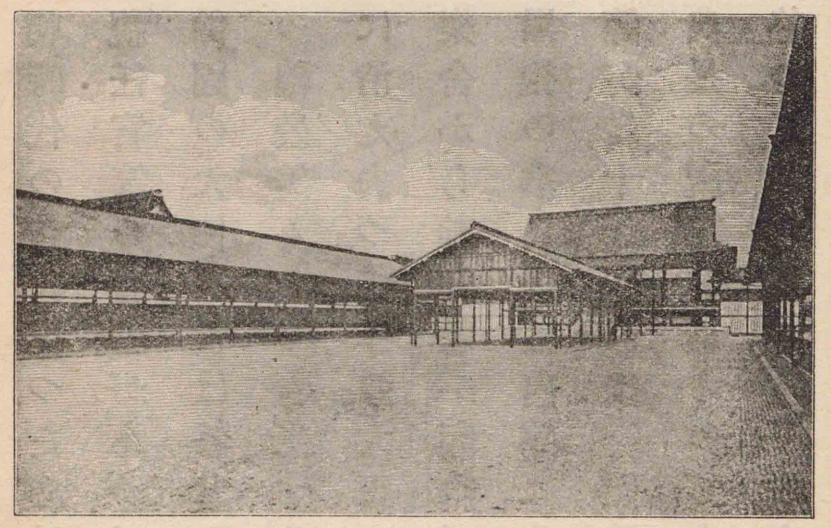
を承つて居る。とにかく一睡しよう。暫しまどろんだと思ふ間もなく起き出ると、七日の夜から八日・九日を降りとほした雨は、夜中から全く霽れて居た。午前六時三十分、烏丸通を北へ、御所の第二朝集所へ急ぐ。車夫は路すがら晴天を喜んで、「天子樣の御威勢は違うたものや。」といふ。

二　賢所大前の儀

新築の第二朝集所は假の普請ながら、檜の香も高く、廣々として大規模なものである。控室は宮中席次によつて、それ〴〵に分れて居る。余は第一室の第

三班である。八時三十分の振鈴と共に、第一班から順次、春興殿大前の幄舍へ左右二列となつて行進する。余は左卽ち西の幄舍に着坐した。

春興殿はもとの內侍所のあつた跡へ御新築になつたのである。檜の白木造で、御金具はきら〳〵と朝日に輝いて居る。正面の御扉は開かれて御簾が垂れてあり、其の前には緋袍の掌典がうづくまつて居る。御階の左手には御羽車舍、右手に樂舍があり、大前には東西二列に威儀の人が並んで居る。福原氏はと見れば、黑袍で卷纓、綏の冠を着け、弓を持ち、胡籙

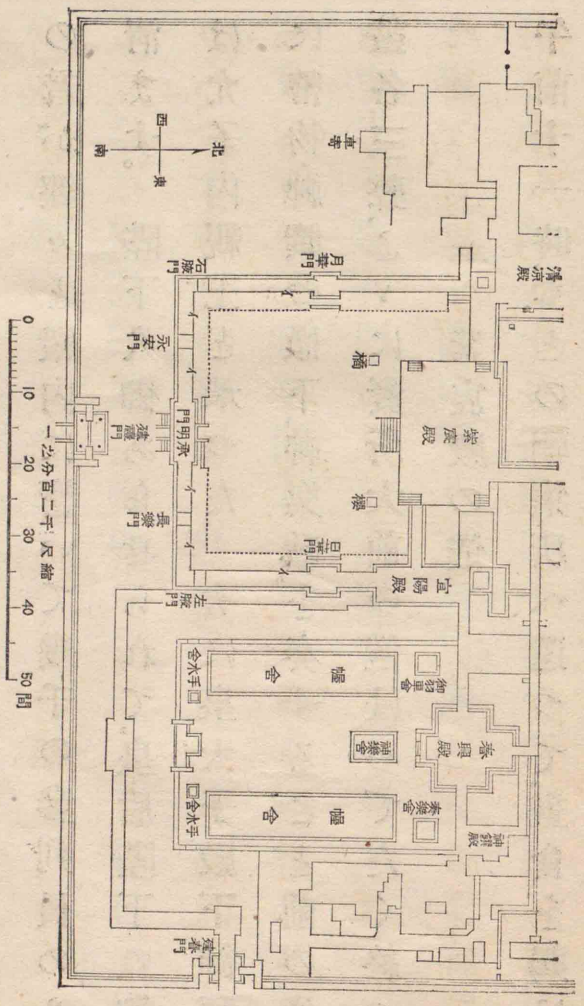


春興殿

を負うて、威儀の本位の第一位に着いて居る。黑袍の前列五人の後には、緋袍が同じく五人。つゞいて太刀・弓・壺胡籙・梓・楯等を捧持した威儀の捧持者が列んで、次には司鉦・司鼓の本位の人、黑の袍・緋の袍・縹色の袍が相連なつて、眞に平安

朝時代の昔に復つた心地がする。　大勳位以下、大臣・親任官等の着席があつて、鉦一聲起立すれば、締盟十餘國の大使・公使は各、其の夫人を帶同して、各國各種の禮裝美々しく着坐する。　平安朝時代の幻影は直に消え去つて、今の大正の大御世となる。

樂舍から神樂歌が起つて、春興殿正面の御簾が上る。黑袍の掌典長は內陣に入り、緋袍・縹袍の掌典・掌典補等が幾十と知れぬ神饌・幣物を捧げる。　つゞいて掌典長の祝詞があるのであらう。　此の間諸員起立。終つて間もなく、陛下の出御である。　供奉の人々の



春興殿紫宸殿平面圖解

御羽車舍　羽車は賢所を乘せ奉る御輿なり。御羽車を入れ置く所。

奏樂舍　神樂歌を奏する所。

神樂舍　後一日、御神樂を奏する所。

宣陽殿　春興殿にて御祭り行はせらるゝに先だち、天皇・皇后・皇族の御服を更めたまふ所。

幄舍　諸員の着席する所。

合　參列諸員の着席する所。

イ　紫宸殿の儀に參列する諸員の着席する所。

ロ　上に着席するものを除くの着席する所。

ハ　假合とは幄を張りたる假合のことなり。

黑袍の中に、御劍を前に御璽を後に、眞白な帛の袍を召した御姿は神々しく拜せられる。これから親しく御告文があるのであらう。内掌典の振鳴らす鈴の音が鏗々と殿内に響いて、幾千の參列員の心耳を清ます。陛下入御あらせられて、皇后陛下の御代拜は允子内親王と承つた。次に皇太子殿下御拜禮、次に幣物・神饌の撤下、神樂歌を奏すること前の通で、鉦・鼓各、三聲、こゝに賢所大前の儀はめでたく終つた。

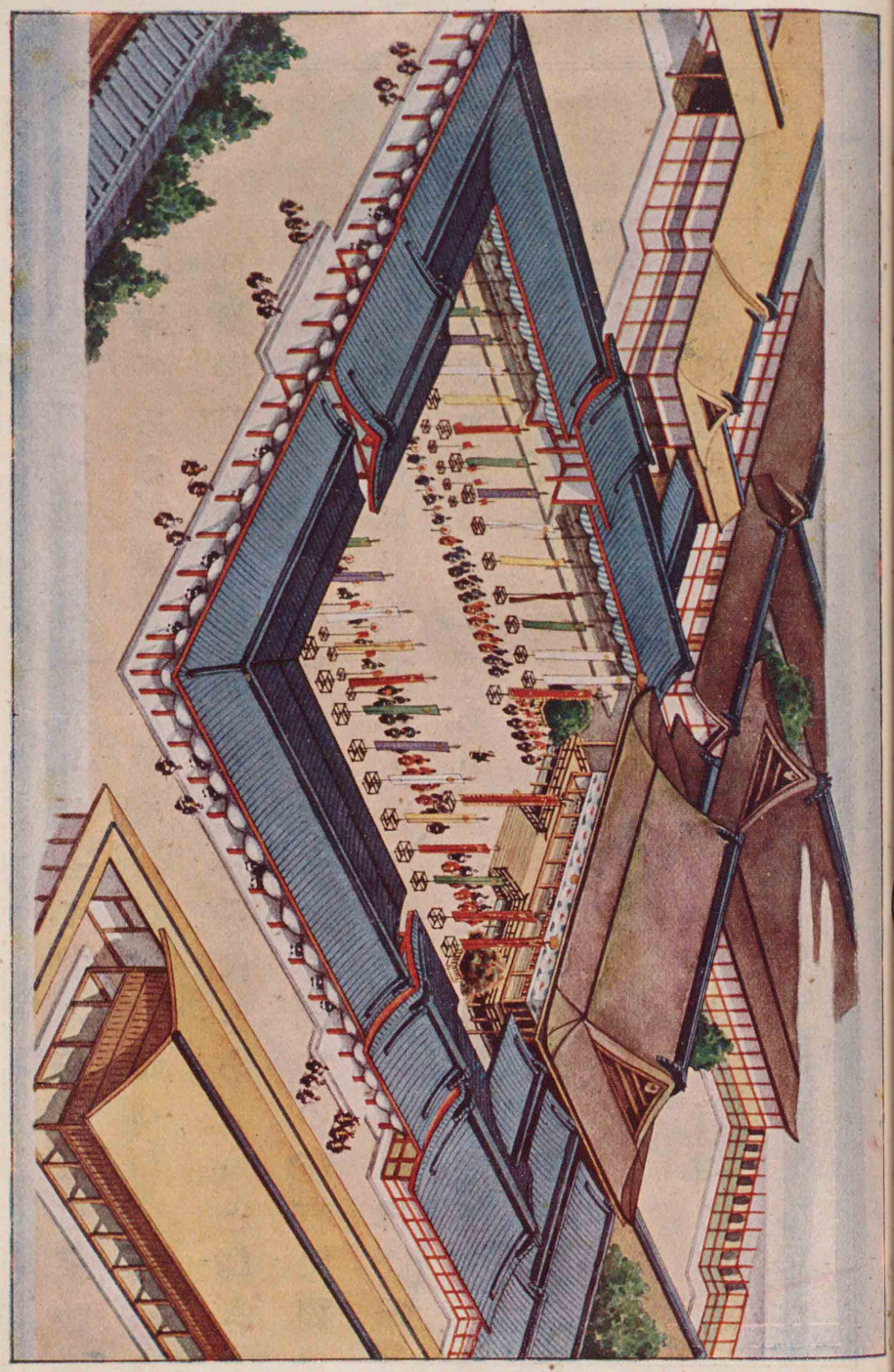
三　紫宸殿の儀

午前十一時、もとの朝集所へ還つて、晝食を賜はる。

休憩中、一時五十分、振鈴は午後の紫宸殿の儀の開始を報ずる。午前の通り左右二列となつて春興殿の前を過ぎ、建春門から紫宸殿の方へ導かれる。さて左列のものは日華門から、右列のものは月華門からはいつて、東西の軒廊へ參列する。一列九人宛である。余が位置は東の軒廊の半ばよりは稍上で、南庭に近く、二列目であつた。

紫宸殿の南廂の外側には、一面に帽額が懸け渡してある。大庭に威儀の人の居並んだのは、賢所大前と同じであるが、殊に美しいのは、大庭に樹て列ねた二

十餘旒の錦旛である。東の方は左近の櫻から一直線に、日像纛旛、赤地の頭八咫烏形大錦旛、續いて青・赤・黄・白・紫の順序で、菊花章中錦旛が五本、それから同じ色の順序で、菊花章小錦旛が五本、西の方は右近の橘から一直線に、月像纛旛、白地の靈鵄形大錦旛、續いて東側と同樣の中錦旛・小錦旛各、五旒づつ、威儀の本位よりは稍下手に、大中小錦旛よりは少しく内側に、東西各一旒の萬歲旛を樹てゝ、これには魚と嚴瓮とを畫き、下に萬歲の二字が書いてある。其の外に桙が各、十本づつ左右に立てゝあり、これにも小旗がつけ

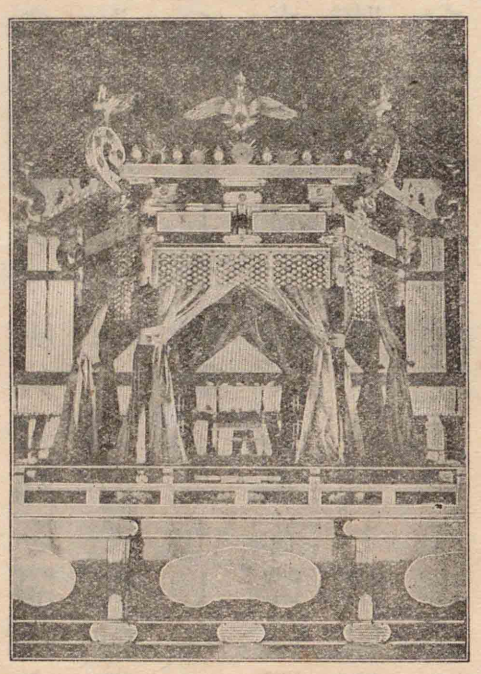


てあるので、黄・紅・白・紫入り雜つて、其の美觀は目も眩い程である。

日像旛の金纛、月像旛の銀纛は殊にきらくと輝きひらめく。やゝ風立つて來たので、錦旛の左右に翻るさまが更に見事である。大庭の白い砂も日に輝いて眼を射るやうである。左近の櫻は半ば紅葉して少しく散つたが、大きな枝が南階の四分の一を蔽うて、殿中の御有樣はよく分らぬ。

追々に着席する人々が見える中に、大隈首相の姿もあらはれる。南階の上に緋袍を着て起立して居た

式部官が一聲高く警蹕を唱へる。今しも出御になつて高御座に御昇りになるのであらう。やがて御帳を褰げ奉るのであらう、鉦の合圖に一同最敬禮。



高御座

間もなく大隈首相は束帶姿で、大禮服の息信常君と祕書官とに扶けられて、西階から下つて、白砂の上を承明門内まで來て、庭上威儀の座の間を通つて、南

階の下に立つ。一歩々々困難な歩みも、折が折ゆゑ却つて莊重に見えた。此の時陛下の勅語が下つた、のであらう。廣い大庭を隔てたことゝて、玉音を承ることは出來ぬ。やがて首相は一階々々南階を上つて、北面して壽詞を奏上した。壽詞を手に差上げた後姿も見え、朗々たる音聲は斷續しながら大抵は聽き取れた。皇祖に對して卽位を奉告あらせられた午前の式の莊嚴なのに比べて、これは又各國使臣を御前に列ねて、高御座から內外の國民に大詔を宣らせ給ふので、極めて雄大な氣象に滿ちて居る。首

相は南階を下つて、兩萬歲旛の中間に立つて萬歲を唱へる。參列の諸員は一同萬歲を歡呼する。續いて萬歲々々。建禮門外の儀仗兵の喇叭は高らかに鳴り渡つて、間もなく百一發の禮砲が轟く。市中には花火の音、汽笛の響、時は正に午後三時三十分。今しも全國七千萬の國民が同じ心に萬歲を唱へ奉り、六百萬の兒童も各、其の校堂で奉祝の唱歌を歌ひ、同じく萬歲を唱へるのである。其の中に首相は元の座に復する。警蹕の聲は再び傳へられる。嚴肅な午後の御儀は、かくして晴やかな賑はしい聲の中に

終つたのである。今回の卽位の禮は、申すまでもなく、明治天皇の御定めになつた登極令に據つて行はれたのである。締盟各國の大公使が賢所大前に列したことは實に前代未聞である。國民の代表者たる衆議院議員一同の參列したことも亦此の度が最初である。此の盛儀を拜し奉つて、今更に先帝の鴻業を欽仰し奉り、國運の進歩を驚歎せずには居られぬのである。今よりざつと五十年以前、先帝の卽位式も亦此の紫宸殿に擧げられたのである。其の時も參列者の一人であつたといふ大隈首相の今昔の感如何。此の紫宸殿の建てられた、今より六十年の昔、黑船の騷に宸襟を惱ませられた孝明天皇が、

戈取をて守き、ものゝふ、九重ぢ
みもしの櫻風そよぐかを。

と遊ばされし頃と今日とを比べると、誰か無量の感慨に打たれぬものがあらう。微臣は今日の光榮を思うて、自ら涕涙の雙頰に流れ下るのを禁じ得なかつた。（帝國文學）

森鷗外
名は林太郎。文學博士醫學博士。（一八六二―一九二二）

二〇　乃木將軍

森鷗外

一

つはものゝ　武勇なきには　あらねども、
眞鐵なす　ベトンに投ぐる　人の肉。
往く者は　生きて還らぬ　强襲の
鋒を　しばし轉じて、　右手のかた、
圖上なる　標の高さ　二零三、
巔の　二つ聳ゆる　石山に
たえぐの　望のいとを　懸けてこそ、
きのふけふ、　軍の主力を　向けてしか。

二

霜月の　三十日の　夕まぐれ、
將軍は　高崎山の　師團より
たゞ一騎、　柳樹房なる　本營に
歸らんと、　曲家屯をぞ　過ぎたまふ。
ほの暗き　道のほとりを　見たまへば、
身うち皆　血に塗れたる　卒ありて、
そびらには、　はやこときれし　將校の
亡骸を　かきのせてこそ　立てりけれ。

三

「汝は誰そ。そを何處にか負ひてゆく。」
「聞召せ。背負ひ奉るは奴わが
主と頼む乃木將軍の愛兒なり。
年老いし將軍の家の二人子、
そのひとり勝典ぬしは いちはやく
南山に うたれ給ひて、殘れるは
おとうとの保典のぬし ひとりのみ。
背負へるは その一人子の亡骸ぞ。

四

父君は 心をゝしく、 我が主をも

隊附の まゝにあらせて、「討死の
身の果は おのれと三人、 葬をば
ひと時に
營め。」と宣り
給ひしを、
人々の
强ひて計らひ
つるにより、 さいつ頃 友安旅團の
副官に 職かはり、 まだ程經ぬに、
この朝開、 あへなくも 空しき骸と

乃木保典 乃木勝典

なりましぬ。

五

果てましゝ　處は高地　二零三。
目鏡もて　敵の備を　望みます
うら若き　額のたゞ中　打ちぬかれ、
ひと言を　のたまはん　ひまもなく、
持口の　南の峰に　うせたまふ。
その骸を　奴背負ひて、　この村に
ありと聞く　野戰病院　たづぬれど、
くるほしき　心からにや　たづねえず。

六

かくいふを　駒をとゞめて　聞きましゝ
將軍は、　病院の旗　ある方を、
鞭あげて　「彼方にこそ。」と　さし給ふ。
面ざしは　たそがれ時に　見えねども、
目ざとくも　雲の絶間ゆ　覗ひし
さむ空に　まだ輝かぬ　冬の星、
更闌けて、　友なる星に、　「將軍の
睫毛だに　動かざりき。」と　語りけり。

（うた日記）

二一 讀書

坪内逍遙

キケロ（冊106-43）

常に良き著述に親しむ者は、只獨り居れども寂しきことを覺えず、師を求めざれども日に月に學ぶ所あり。失意にも慰み、不平・憂悶も之を忘る。「書は少年の滋味にして老年の娯樂なり。順境には心の飾ともなり、逆境には庇護と慰安とを與ふ。家に在れば心を樂しましめ、外に出でたる時も邪魔とはならず。夜の伴、旅の伴、僻地の伴」と羅馬の名士キケロの言ひたるも同じ心なり。されど、かくの如きは人の讀書より受くる最大の利益にはあらず。

諺に「百聞一見に如かず」といへるは、何事も其の身親しく經驗するに如かずといふ意味なれども、人の壽命に限あれば、七十・八十まで生きたりとも、目に視、耳に聽くことは幾何もあるべからず。我が日本國内の山水・風俗だけにても一生には觀察し盡さるまじきを思ひ、天地の大なるを思ひ、時の窮なきを思へば、人間一身の經驗の狹く、淺く、小さく、且少かるべきは言ふにも及ばぬことなり。されば、こそ、今も昔も苟も事物の眞の理を知らんと欲し、事物の眞の相を看んと欲する人々は、一方には見聞を勵み、經驗を努む

ると共に、他方には廣く内外古今の名著を得て之に親しまんことを願ふなれ。所謂名著は、人間世界開けてこのかた凡そ三千年間に出でし大賢・高德・碩學・大才の經驗・觀察・思索・想像をそのまゝに、又はランビキにかけて傳へたるものなり。或は顯微鏡・望遠鏡に譬ふるも可なり。固より人工に成りたるものなれども、人をして肉眼にて看得ざる微なるものをも、遠く且大なるものをも看取せしむ。後れて生れたる者にして良書の助を藉ることなく、只其の貧弱なる腦力のみを恃まば、自然界の事も人間界の事も、僅

に一斑を窺ふに過ぎざるべく、其の一斑さへも正しく明かには看得ざるべきが常なり。要するに、書は知識の寶庫にして、兼ねて智を研く砥石なり。しかしながら讀書の用は尚之に盡きたるに非ず。

ペトラルカ（1304—1374）

伊太利の詩人ペトラルカは曰く、「予に良友あり。彼等は皆名士・大家にして、何れも偉業を成したる者なり。予若し其の助を藉らんとすれば、彼等は喜んで我が請を容る。」と。

チャンニング（1780—1842）

是、良書が常に其の讀者を啓發し、誨導し、鼓舞し、奬勵する力あるをいへるなり。北米の名士チャンニングも亦曰く、「吾人が、傑出せる心と

相語ることを得るは、おもに書籍の媒介に因る。而して、かゝる價知らぬ交際の手段は、衆人の自在に用ひ得る所なり。最良の書に在りては、俊傑、吾人に對ひて語り、其の最も貴き思想を吾人に與へ、且其の心靈を吾人の爲に吐露す」と。英國の詩人ミルトンもまた曰く、「良書は保全蹈襲して後世に傳へられたる俊傑の貴重なる生血なり」と。

人は良書に親しみて、まづ我が卑小なるを知るなり。次には或は他の識見の大なるに驚き、或は品性の高きに感じ、「嗚呼、同じく人といふ、高く、清く、美しく偉なることかくの如きものもあるか」と歎ずるなり。若し假初にも其の偉なるもの、美しきもの、清きもの、高きものに私淑し、之に倣はんとする志を生じ、日に月に力め行ふに至りなば、書の用極れるにちかしといふべし。（中學修身訓）

ミルトン（1608—1674）

二三　古今千遍

雨森芳洲

舊歲御狀相違—御返書來ず候うち
新歲の芳翰又〻相違—奉拜見仕候弥
御壯國に御重業成さ候由欽慰此事に存ず

雨森芳洲名は誠清。對馬侯の儒臣。（一六六八—一七五五）

奉り候此許相変ぜず私儀無為に罷在候両度共に御佳作拝見致し候て一京以後別して御精出し被遊事に御座候哉格別に御上達成され候様に存じ奉り珍重之に過ぎず候詩は『微多、看多、高量多』と申候兎角多く御作り成され上手に御成り遊ばすべく候高量の字覚づは人と相談すべく候申候へども人と相談致すばかりにては之なく心を以て心に問い我が心まで思案する事にて高量と申和韻の事仰せ聞けられ候変此許御逗留中は一時の御挨拶と存じ悪詩も

繁右衛門
古川氏。名は方久。對馬藩の國老。

作り申候へども上方にては恥かしく御座候てのばせ難く御座候故和韻をば仕り申候に御宿怒下さる様にとよつてかしき話御座候故書きつけ御目に懸け候御笑い下さるべく候

去年より繁右衛門杯皆寄合い歌の會を致し間々私其の座へ参り候事に候へば初めは兎歌を詠み候事に申候へば詩は平仄かく習い覚え居候へども歌は遂に百人一首の講釋をも承り候事に御座なくつかけ申さず一つも存じ明き申さず候其上歌詞とても尚と存じ申さず候

古今千遍讀く申す願を心ふかく申て最早百五十遍は昨日迄に讀み終せ申候今迄の積りふ致候へバ八十四の七月に千遍の數滿ち申候積りに御座候其間に老耄致かか又は閻羅王より勾引鬼ぶ遣はし申さるゝ時ハ仕るべき樣ハ之なく候へども申づハ願を滿し候心に御座候右千遍讀み終て歌を詠みかゝり其心に御座候是ハ寿命の事ハわきふのけ置きてあ分別に御座候へばさりとをのき事に御座候得ハ私最早世間に望みある者にハ之なく候間ば如く致して死を待ち候ハ一奇事と存じ立ち出事に御座候此段書きつけ御目に懸け候ハ老人ぶふかく存候事に御座候故皆樣にハ御年少ふ御座候ハ尚く徒に長寿なるぶ樣申度此の如くに御座候因て之の面々へ御參會の節此旨御傳へ成ハ下さる様く頼み奉り候申度事ハ御座候ぶ老筆堪へ難く早く貴答に及び候餘ハ後音を期ハ候恐く謹言

（新撰書簡集）

二三　本多重次

新井白石

徳川殿　徳川家康。

本多重次　作左衛門と稱す。徳川氏の臣。（一三六九―一三九六）

天正十三年、徳川殿御背中に疔といふもの出來て既に危く見えさせ給ひしかば、内外の醫療、術を盡しけれども、その驗なく、唯弱りに弱らせ給ひ、自らもこれまでと思召しけるにや、宗徒の御家人等召集めて御跡の事ども仰せ置かる。　人々の周章いふに及ばず、土民・百姓等に至るまで、その程々に從ひて祈らぬ神佛もなく、立てぬ願もなし。

重次御枕に取りつきて泣く〳〵申しけるは、「殿も定めて覺えさせ給ひなん、重次が昔、此の病を受けしに、たちどころに驗を得し良醫の候。　彼を召して見せ試み給ふべし」と申す。「諸醫既に手を束ね、家康亦死を決す。　この上醫療其の詮なし。　且は命を惜むに似たり」とて用ひ給はず。

重次大いに怒つて、「斯程大事の腫物輕々しく思召し侮つて、事急なるに臨めばこそ諸醫も術盡きぬれ。それに又良醫して治し參らせんとするをも用ひ給はず、失せたまはん事、御心がらとは言ひながらあつたらしき命かな。　諸醫、術盡きぬと申す上は、彼爭でか治し參らすべき。　年老いたる重次が御跡にさがつての御供叶ふべからず。　さらば御先へ參らん」と

て、御前を罷立つ。

徳川殿大いに驚かせ給ひ、「あれ止めよ。」と仰せければ、近く侍ふ人々走出で引留め、「仰せらるべき旨あらせられ候。」といふ。重次大いに聲を怒らかして、「最期の暇乞うて罷り申す者を、見苦しい殿ばらの止めやうや。」と罵つて出でんとす。「されば候。その人を止めよとの御使が、えこそ止めぬと申せとは、おとなしくも候はぬ本多殿。」といはれて、「げにさも候。」とて御前にまゐる。

徳川殿、「汝は物に狂ひてかくはいふか。家康未だ死

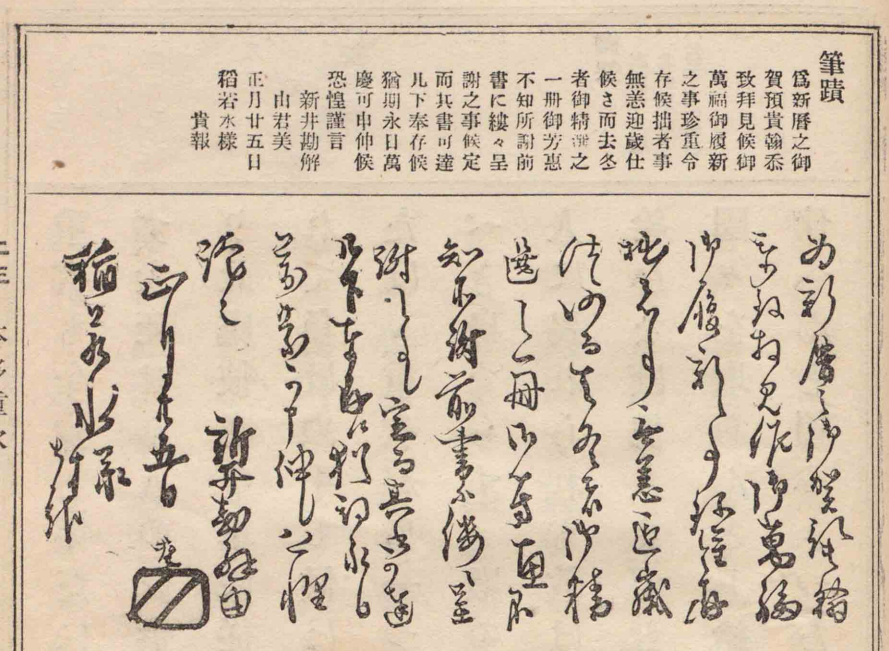
筆蹟

爲新暦之御賀預貴翰忝致拜見候御萬福御履新之事珍重令存候拙者事無恙迎歳仕候さ而去冬者御精進之一冊御芳恵不知所謝前書に縷々呈謝之事候定而其書可達凡下奉存候猶期永日萬慶可申仲候恐惶謹言

新井勘解由君美

正月廿五日

稲若水様　貴報



新井白石筆蹟

し果てぬに、縱ひ家康が命をはるとも、汝が世に在らんを頼にこそ死すべけれ。又汝等も如何にもして、一日も世に殘りて、若き者ども掟して、我が家の絶えざらんやうを計らんとは思はずして、詮なき死の供せんとする事やある。」と仰せければ、「いやく、それは人によりての事に候。

重次も今少し年だに若く候はんには、仰までも候はず、犬死せん人の御供、其の詮なし。　重次、若年の昔より、此處彼處の軍に從ひて、眼射られ、指落され、足切られて負はぬ手も候はず。　人のかたはといふ程のかたはゝ、重次が身一つに餘つて、世に交らんこと叶ふべき身ならず。　殿の御情深ければこそ當家にては人に畏れられも敬はれもしつれ。　殿の亡くならせ給ひなば、他人までも候まじ、まづ御聟の北條殿、我が國々を取らんとし給はんに、若き人々が行末久しう仕へんと賴みきつたる主に忽ち別れて氣後れし、は

御聟　家康の女壻北條氏直。（一三三一―一三五〇）

かゞ〳〵しき矢の一筋をも射出すこと叶ふべからず。　當家滅されんこと、亦踵を回らすべからず。　重次それまで存へて、『あの年よつたるかたはものは德川殿の譜代にて、何がしといはれし家人なるが、いかに惜しき命なればかく世に恥をさらすらん。』と後指さゝれん事、老の恥何事かこれに過ぎ候べき。　此の頃までも武田の家の人々御當家へ召されて、さらぬ人にも手をさげ腰を屈めしを世にもあはれに思ひしが、今は此の老人めが身の上になつて候と存ずれば、殿におくれ參らせんが悲しきばかりにも候はず、我が

武田　武田勝賴。（一三〇六―一三四二）

身の果もあさましきによつて御先に死することにて候」と申す。

「汝が言ふ所、ことわり至極せり。さらば醫療の事は汝が心に任すべし。天命既に至りて、家康空しくならんとも、汝も亦家康が心に任せ、いかなる恥を見つべくとも、一日も生殘つて、後の事よきに計らふべしと存ずるや否や」と仰せければ、「重次が申す旨に任せられんには、重次いかで又仰をや背くべき」と申す。

「さらば醫師召させよ」とて召さる。

醫師やがて參つて、「御灸治宜しかるべし」と申せば、重次艾取つて据う。御灸の痛覺えさせ給はねば、艾を增加ふること多くして後、聊か痛ませ給ふ由、仰せければ、御藥をつけて參らせ、御藥湯をも進め奉りしに、その夜の半ばに、御腫物潰れて、膿水・血、夥しう流れ出で、御惱立どころに輕ませたまへば、重次は嬉泣に聲を限りに泣く。御前伺候の人々も感涙を共に流しけり。（藩翰譜）

二四　寒稽古

控室に掲示あり。「劍道寒稽古は愈、明日より開始せ

らる」。

いでや新しき年の首途に猛く雄々しく戰はん。籠手の破も繕ひたり、竹刀の拵も調ひたり。常にはいぎたなき吾なれど、誓つて遲刻はすまじ。おくれは武士の禁物ぞ。今宵は早く寢に就かん。

目覺し時計の音す。はや五時になりたるか、一夜は既に過ぎたるか。暖き寢床の離れ難くもあるかな。さばれ昨夜の誓、この一秒の逡巡こそ吾を最後の暗黑に導く惡魔なれ。早く〳〵と響く鈴の音。いざやとばかり衾を蹴て起きあがり、支度そこ〳〵道場

に急ぎ行く。

待ちかね顏なり、電燈の光。半ばは眠のさめやらぬげなる人々も、面を被り、胴をつけ、竹刀をとれば、はや活動の人なり、覺醒の人なり。面を打ち、胴を拂ひ、籠手を切り、喉を突く。拂つては打ち、打つては拂ふ。飛込む足音、打込むかけ聲。我を忘れし難戰苦鬪の間にも、「めん」と打たれて「頂戴」と叫び、「籠手」と切られて「まゐり」とかへす。一絲亂れぬ武士の作法。ワーテルローの勇將ウェリントンをして見しめなば、「旅順の堅壘を陷れしものこの裡にあり」とや云はん。

ワーテルロー　白耳義の中部、一八一五年英將ウェリントン(1769—1852)が佛普二國の兵を率ゐてナポレオンを敗りし古戰場。

空に輝く星影は目にも入らず、窓打つ風は耳にも入らず。流汗淋漓冬猶熱し。臥床の上の懈怠心、今は た何處にある。一擊々々又一擊、夜は既に明けはなれ、望の色は東の空を染めて美しく、彼方に聞ゆる雞の聲さへ勝鬨をあぐるかと思はる。

六時半頃稽古を終へ、汗を拭きつゝ家に歸る。己に克ち、自然に克ち、人に克ち得て朝食に向ふ心地よさ。また來ん朝も來ん朝も、今朝の愉快を例にて常に勝利の人となり、成すべきことを成し了へて、此の一年を凱歌の裏に送らん。

徳川齊昭 水戸藩主。（一七九〇—一八五〇）この書は餘四麿附の女中頭へ遣はせるものなり。

綠の間 齊昭の生母お家の方。

餘四麿 齊昭の第十四子昭訓。

神勢館 嘉永五年齊昭が藩士の爲に水戸城外の細谷村に設けたる砲術練習場。

二五 公子の躾方を申遣はす

徳川齊昭

餘寒の處、その地子供等、綠の間にも障なきは一段の事に候。去る二十七日、餘四麿事、神勢館へ行き候由、是よりは步行又は乘馬にて度々行き候が宜しく候。朝も未明より起き、水にて顏を洗ひ、薄着にて庭などに出で、子供相應いたづら致候が宜しく候。風を引き申すべしなど申して、用心致させ候は以ての外に候。とかく武士の子は、手强く手あらに成長致し申さず候ては、

追々成長の上、公家や町人・出家の様に成り行き、天下の御爲を致候様相成らざるゆゑ、何分にも手強く體を幼年より鍛へて育て候様に致したく候。さて、文武共に出精致させ候が宜しく候。文武を勵まし、それにて死に候ほどの子は惜しからず候へば、死に候ても苦しからず候。他家へ養子に遣はし候ても、柔弱にて文武これなき者にては、水戸家の外聞宜しからず。死に候は、誰にても一度は死に候者故、外聞宜しからざる子供が成長致候位に候はゞ、死に候方はるかに

伊勢
餘四麿附の女中の名。

好文亭
天保十年齊昭水戸の西郊に偕樂園を開き中央に好文亭を建つ。

徳川齊昭（東京帝室博物館藏）

勝り候故、表の附の者、並に伊勢等へも申聞候て、前文の通り、手あらく仕立候て、文武を勵まし申すべく候。奥にても、附の者に申聞候て、讀書のさらひ等をよく〳〵致させ申すべく候。畫は、文武稽古の間は、前文に申す如く神勢館又は好文亭等へ歩行致候が宜し、又

相手などと竹刀打致候が宜し。子供の大人の如く致居候は、身のこなれ悪しく、宜しからず候。如才はこれあるまじく候へども、序に任せ申遣はし候。牛乳は人乳をやめ候程の子供は誰が用ひ候ても宜し、毎朝取立の乳を飲ませ申すべく候。一人にて五勺か一

徳川齊昭筆蹟（水戸弘道館記碑）

松延・本間　共に水戸藩醫。

一橋　一橋家徳川慶喜。

柴田鳩翁　名は亨。心學者。（一七四三―一八四九）

合も飲み候はゞ足り申すべく候。これは松延・本間等へ申し談じ候が宜し。一橋よりは今以て日々取りに來り、一二合許宛遣はし申候。何よりも牛乳に越し候藥はこれなしと存候也。

尚々餘四磨始め、毎朝の水は只今にても浴び候事と存候。若し浴び申さず候はゞ、浴びせ申すべく候。さるかはり、湯は遣はせ申すまじく候。

二六　道話一則

柴田鳩翁

さる御町内に婚禮振舞がござりました。お年寄をはじめ、町役・家持の人々、一同に座に就きますると、様様の馳走がある。時に、かの年寄は、酒と聞いては笹の露にも醉ふ程の下戸ぢや。座中を廻る杯の間、退屈さうにしてゐられると、亭主方が氣の毒に思ひ、「お年寄様は御酒は召しあがらず、御退屈にござりませう。ちと、お菓子なりとも御取りくだされい。」と、南京の古染附けの壺に大りんの金米糖を入れて年寄の前へ持つて來る。座中も「これは好いお心附、ひらにお菓子を召しあがられい。」とすゝめる。年寄もわる

うはなし、「然らば頂戴を致しませう。」と、壺を引きあげ、手首を突込みしなに少しきしむやうに覺えたが、無理に手を差入れて撮み出さうとするに、手首がつまつて拔けませぬ。どうぞして拔けるかと、色々にこじまはして見ても、ひつぱつて見ても拔けず、まごまごして居らるゝと、側から見つけて、「どうなされましたぞ。」「いや、手が少しつまりまして思ふやうに拔けませぬ。」と眞顏になつていはるゝ。「それは氣の毒。私が壺を持つて居りませう。」無理無體に手をお引きなされ。」と、一人が向ふへまはつて壺をつかまへ、あ

景清　惡七兵衛平景清。
美保谷　美保谷十郎。
司馬溫公　名は光。宋代の大儒。（一六二九―一七四六）

とへ引くと、年寄は手を前へ引く。互にえいやと引合ふ有様、景清と美保谷が鐚曳をするやうなと、座中が一同にどつと笑へど、年寄はなかく笑はず、泣顔になつて、「どうも痛んで拔けませぬ。」といふ。さあ、これから大騒になり、「醫者どのを呼んで來い。接骨ではいくまいか。」と、酒宴の興も醒めはてました。

時に五人組が一人進み出て、「いづれもお騒ぎなされな。我ら承つたことがある。『昔、司馬溫公といふ人、幼きとき、大勢の子供と共に大きなる壺のほとりに遊びましたが、一人の子供、過つてかの壺の中へはまりました。大勢の子供はこれを見て逃げ歸つたが、司馬溫公一人は歸らず、傍なる手頃の石を取つて、かの壺へ投附けましたれば、壺は割れて、はまつた子供は不思議に命を助りました。』と或人の話ぢや。今お年寄の御難澁は、この話により似てある。いざや、我等が司馬溫公となつて、たとへばその古染附けの壺が、失禮ながら何程高金の品でも、お年寄の腕には換へられぬ。」と、しかつべらしく煙管を提げ、向ふへ廻れば、年寄は氣の毒さうに、壺をかぶつた手を突出すと、只一打に打碎いた。何が、座中は金米糖が散らかつ

て雪を降らした様になると、「やれ、お年寄お助りなさ
れたか。」と其の手を見れば、拔けぬこそ道理なれ、金米
糖を一杯つかんで居られたと申すことぢや。何と、
をかしい話ではござりませぬか。
つかんだものを放しさへすれば自由自在に手は拔
けたものを、一度つかんだら首がちぎれても離すま
いと片意地なうまれつき、それで自由自在の大安樂
が出來ぬのぢや。かく申せば金錢の事のやうなれ
ど、つかむものはこればかりではない。腕、前のある
のをつかみ、賢いをつかみ、負けをしみをつかみ、家柄

井上毅
前文部大臣。子爵。
（一八〇四—一八九五）
故右府公
右大臣岩倉具視。
（一八二五—一八八三）

をつかみ、身代のよいのをつかんで離すまいとかつ
ぎ歩くによつて、教を聞く事もならず、樂をする事も
ならず、愼も出來ず、せん方なさに癪氣抑へたり、顏し
かめたり、酒飲んで紛らしたり、さりとては氣の毒な
ものでござります。壺割つて仕舞うてからは、何い
うても詮ない事ぢや。身代の壺を割らぬさき、御用
心が第一でござります。（鳩翁道話）

二七　岩倉右府 その一

井上　毅

月日の小車は旋りく、て流るゝ水よりも早く、故右

府公の世を去り給ひしより、今ははや十年餘りぞ過ぎぬる。

大詔のまに〳〵我が國を富士がねの安きに置かでやはと思ひ入り給へる公の一筋の誠心は、天地の間に滿ち渡りて、窮みなき後の世まで語り繼ぎ聞き繼ぐべければ、今更に言ふまでもなきことながら、公の逸事の一二を思ひ出づるまゝに書き記して、世の鑑ともし、史人の料ともなさん。

維新の初に、神武の古に復るといへる大義を定められしは、この公の輔翼の力にぞある。碩學野々口隆正氏の說に、「建武中興の振はざりしは、當時の搢紳にその人なかりしによれり。源親房卿は學識ありて時の帝の御覺もめでたかりしかど、その人の所見は延喜・天曆の跡に復るにありて、神武の古に復る事を知らず。さてこそ公家・武家の間に隙を生ぜしなれ」。といへり。

故右府公は搢紳有職の家に生ひ立ち給ひしかど、夙に大勢を達觀して王政に公武の別なきことを看破し、中興の實を擧ぐるために、神武の古に復るといへる一大義を唱へ給へるは、これぞ明治の朝廷に人あ

大政返上
慶應三年十月十四日。

岩倉村蟄居
文久二年九月山城國愛宕郡岩倉村に蟄居せらる。

りと申すべき。この一大義は百揆庶政の原動力となりて、藤原氏以來千有餘年間の盤根錯節をば、總て破竹の勢を以て破りたり。世の人は、明治の中興は五百年來の武門の政を破りたるなりと思ふらめど、心ある人は、溯りて天平以來の宿弊の更に破り難きを破られたることを知るならん。

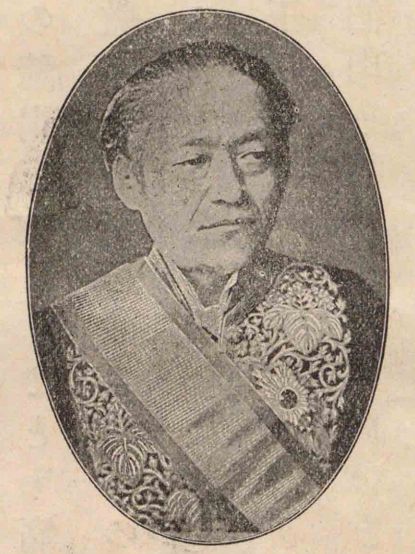
徳川氏の大政を返上せし際には、公は譴を蒙りて久しき間岩倉村に蟄居し、天日をも見給はざりしが、俄に召によりて夜中參内し給ひけり。この折、公は一の大嚢を携へて宮門に入り給ひしが、嚢中の文書は

玉松操
京都の人。勤王家。
（一八四〇—一八六〇）

大令
慶應三年十二月王政復古の大令下る。

皆公の蟄居中に計畫せられて、玉松操といふ人に起草せしめられつる復古經綸の策案なりき。

この時、大勢なほ定まらずして物論紛々たりしに、公は俄に躬を以て責に當り、從容として應答せしかば、雄藩の主も爲に容を改め、朝議大いに決するに至る。而して大令一度發して、外は將軍を廢し、内は攝關・議奏・傳奏を廢し、親政の洪圖を旬日の内に定め、後世動かすべから


岩倉具視

ざる基礎を立てられたるは、實に公の補翼の力なり。就中復古の第三日に、禁闕に達文を掲げられて女房の請謁を納るゝことを痛く禁止せられたるは、是ぞ數年の宿弊を除き、將來の爲に一大美事を遺されたるなると、公の晩年に親しく物語し給ひき。

玉松操は一の偉丈夫なりき。平生聲色を近づけず、酒肉を嗜まず、書を讀むを樂みとなし、夙に神武復古の說を抱きぬ。偶、公に知られて蟄居の一室を貸し與へられ、起居を倶にして畫策する所あり。公は玉松の功を推して、「己の初年の事業は皆彼の力なり。」と

までのたまへり。薨去の前年に、一夕ことさらに余を召して玉松の履歷を物語し給ひ、「その人の功績を空しくなせそ。書き記して後の世の語り繼ぎの料とせよ。」と慇懃に仰せられけり。此の夜、余は他の二人を誘ひて倶に侍りしが、その中の一人は漏れなく公の物語を筆に留めたり。己の功を推して人に讓り給ふことといとめでたし。

その後、公の朝廷に勸めまゐらせて、斷然と開國の國是を執らるゝに及びて、玉松は、「姦雄に誤られたり。」との一語を言ひ放ちて公の許を辭し、召されても應へ

だにせず、一室に屏風をたて籠め、その中にて讀書に日を送りけるが、「功を論じ賞を頒つ日に逢はずして世を去りぬるぞ歎かはしき。」と公ののたまひし。

公は蟄居していましながら、その家の裏の隱戸より、人知れず大久保・木戸・小松・廣澤等の諸名士を引きて內外の大勢を談論せられ、此の時已に鎖國の非なることを悟らせられつるに、玉松は露ほどもこの事を知らざりけり。彼が口惜しく思ひつるも理なりき。

諸名士
大久保利通。
木戸孝允。
小松清廉。
廣澤眞臣。

二八　岩倉右府その二

井上毅

維新後の公が翼贊の功は、明治の大御史と倶に後の世に傳ふべきなれば、こゝに書きつゞくる要なけれど、公は己の勞を露ほども誇りがほに人に語り給ふことなかりしほどに、史人もえ知らぬことぞ多かめる。世の人は、明治二十年と二十二年との條約改正中止の件をば、何某の盡力にて、となりし、かくなりしなど、事々しく言ひはやせど、この事のおこりは十五年にて、公はあかず思召すことありて一方ならず心を盡し給ひ、そのをり一たび中止となれり。されども公は深く祕め給ひて、文書一箱ほどもあるを家に

藏めて出さゞりしかば、内々の人ならでは、え知る者なかりき。此等は後の人の鑑にこそ。

剛膽は政事家の第一要德なりとぞ聞ゆる。公は長袖の人とも覺えぬばかりに剛毅の德を備へおはしけり。征韓の議、今にも蕭牆の内に變亂を見んとする時に、陸軍將校の中にて武勇の聞えある一人は公の邸に參り、客室に謁見し、一應二應議論の末、怒れる眼血をそゝぎ、毛髮倒に竪ち、脇差を左の手にて鞘も撓むばかりに握りつめ、「貴殿若し意見を枉げ給はずば、御身のために惡しかりなん」と言ひ放ちつゝ膝と

膝との間一尺ばかりにまでつめかけたり。此の時公の家の侍ども次の間に控へ居て障子の隙より窺ひつゝ、あはやと手に汗を握りたりしに、公は少しも動ずる色なく、自若としてその座を守り給ひきとぞ内の人の物語りし。

公のかしこきあたりの御覺え殊にめでたかりしは、世の人の知る所なるが「大君の御爲とならば、我をおきて人はあらじ」と思ひ給へる隱さはぬ明き心の深かりしは、これぞ君臣水魚とも申し奉るべきか、雲の上の事は筆に載するも畏ければ洩らしぬ。

公は大久保故内務卿と心交特に深くおはしき。岩倉村蟄居の折より、大久保卿は密々の往復しきりなりしが、「公の身の上心もとなし」とて、夜な〳〵年少き侍を遣はして守衛せさせつることありしを、公は知り給はざりき。西南の亂平ぎし後、兩公の間に契り給ふ事ありしが、日ならざるに大久保卿の遭難とはなりぬ。一日、公の物語に「世の人大久保の志を知りたらんには、いかばかりか哀しみ思ふらん。維新のはじめ十年間は創業撥亂の時なりき。これより後十年こそは内治を整理し民利を進むる時なれとて、

將來のために大いに計畫する所ありしに、料らずもかたみの言葉とはなりぬ」とのたまへり。

公は夙に開國の國是を唱へ給ひつゝ、又厚く國體の基礎を重んじ給ひき。晩年公の奏上によりて宮内省に帝室制度取調局を設けられしは、祖宗遺訓の貴きことを世に知らせん爲の計らひとぞ聞えし。

公は勤儉の二字を大政の本として輔弼に心を盡し給ひき。又家を治むるにも儉約を旨とせられ、台鼎の高き位に上り給ひし後も、「岩倉村の蟄居の時をな忘れそ」とて、常に公達を戒め給ひけり。薨去の前、家

範を作り、「後の世まで守り文にせよ。」とて子孫に遺し給ひしが、その附錄一篇は專ら奢侈と遊惰とを戒め給ひ、重き病の床にいましつゝ、親しく旨を授けて侍ふ人に筆執らせ給ひし條にぞある。一門の人々が案文に調印せしは七月十五日にして、薨去の前五日なりけり。今はの際に遺言ありて、「己の墓石は父君の墓石の寸法に準へよ。」とありきとなん。

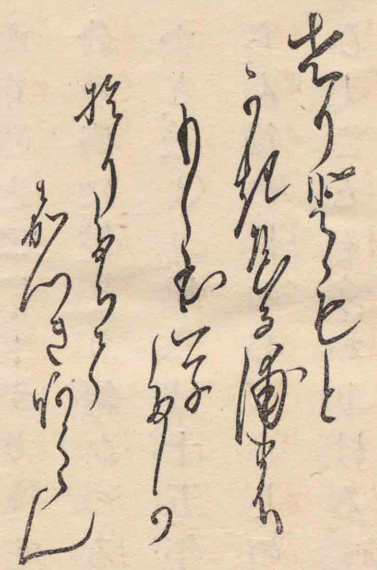
公は日に夜に公の事にのみ心を碎きて、寸時も餘りの暇あらせ給はざりき。朝四時前には目を覺し、「侍やある。」と聲かけさせ給ひ、「今日は何某をば何時に召せ。次に、何某をば何時に呼べ。又明日は何某に『何時に來れ。』何某に『夕何時に參れ。』と記して申遣はせ。」などゝ仰せられき。多くの公達は父君の代筆として、文かくことに忙しかりきとなん。

公の病に侵され給ひつるは明治十六年の春なりしかど、後より思へば、十五年の頃より、何となくあらざらん後の世の心づくしの節々を知る人に語らせ給ひしことぞ多かりける。同年の冬或人のもとに贈り給へる書の末に、

きりぎもとうたやる浦は藻鹽草、

たがれり為ちてうづきいのぐらん。

とぞありし。先だつも後るゝも世の習とはいひながら、御國のために行末を思ひやられし公の心こそいとあはれなれ。



岩倉具視筆蹟（井上子爵家藏）

公の平生の仰に、「大臣たるものはその進退によりて節操を二つにすべきにあらず。維新の功臣、晩節を全くせざるもの多きぞ口惜しきことの極みなる。われこそ躬を以て人

臣の標準は示さめ」とのたまひしが、病重らせ給ひし後、辭表を捧げん事を思ひ立ち給ひ、同僚の諸卿が支へ止めまゐらせしも聽き入れず、是非にとて歎き請ひ給ひしかば、上には忝くも誠ある意ばへを酌ませ給ひ、聞き届けさせ、厚き惠の御敕をさへ下し賜ひけり。かくと承りて、公はさしもに重き衾を押退け、涙に咽び、天恩の忝きを拜謝しつゝ、急ぎ家の子等を召し集へられ、「今日こそは病の輕きを覺えたれ。それ盃まゐれ」とて酒を賜ひけり。人々歡の色をなしたりけるが、さてその翌日に事重らせ給ひぬるぞかひ

なき。今はの際まで、夢幻の間にも、公の事のみ心に懸けさせ給ひ、なからん後の事までも人もて雲の上に聞え上げまゐらせしこともありきとなん。

余は本末の序もなく思ひ出づるまゝに書き續けぬ。あはれ、この文讀まん人々よ、なき人のかきやりつる藻鹽草を、いやつぎ〳〵にかづきあぐべき丈夫の伴となりて、公の地下の靈を百載の後にまで慰めよかし。（梧陰存稿）

中學國文教科書卷四終

文部省檢定濟
大正七年一月九日　中學校國語科教科書

明治三十九年十月十五日印刷
明治三十九年十月十八日發行
明治四十年一月十一日訂正再版發行
明治四十三年十一月五日修正三版發行
明治四十四年一月廿八日修正四版發行
明治四十四年十二月十五日修正五版發行
大正七年一月二日修正十二版印刷
大正七年一月五日修正十二版發行

明治四十五年二月廿六日修正六版發行
大正元年十月三十日修正七版發行
大正三年十二月廿三日修正八版發行
大正四年一月廿八日修正十九版發行
大正六年十月三十日修正十一版發行

定價		
卷一・二	金三拾四錢	金七拾五錢
自三至八	金三拾錢	金六拾六錢
卷九・十	金二拾八錢	金六拾二錢

大正十年度臨時定價

中學國文教科書卷四

著作所　有

編者　東京市小石川區高田老松町五十二番地　吉田彌平

發行者　東京市神田區裏神保町六番地　上原才一郎

發行所　東京市神田區裏神保町六番地　光風館書店（電話神田三千八十七番）（振替口座東京三二七番）

關西專賣所　大阪市東區淡路町四町丁目四十二番地　大阪寶文館

本館發行の教科書は常に多數の製本準備有之候に付萬一各地賣捌所に賣切等にて課業に御差支の節は直接御註文被下候はゞ直ちに御送附可致候

株式會社秀英舍第一工場印刷